

前世ゲーマーだったヤ  
ツが東方の世界にログ  
インしました

LCRCL（エルマル）

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

某病氣で死んだ男、三雲幻斗。

東方の世界に転生した彼は2度目の人生を謳歌できるのか!?

※キャラ崩壊、原作崩壊、独自解釈注意。

目次

隠れた契約

リーフア・ブリーズ

悲報・月夜見、会つて数秒で幽香にケンカ

を売られるwww

月夜見は早く来た

お前はもう九尾になつてゐる

湯呑マツスルアタック

神靈廟

思いついたらすぐ実行

幻斗、月の都に行く

月の都、到着！

観光

月でもラーメンは美味しい

223 218 214 209 204 199 194 190 186 180 175 171

ぢごくの女神さん

惑星が降つてくる

235

月から帰還

薬を飲んだ姫さん

レツツゴー平安京

もこたん（の家）にinしたお！

253

249 245 240

229

# 始まり

s i d e 三雲玄斗

俺は三雲玄斗、ゲーマー：だつた。

確か俺は某病気で死んだハズなんだが…目が覚めると白い空間にいた。

玄斗「どこだ、ココ？」

死んだと思つたら白い空間…まさか。

玄斗「俺、転生したりするのか？」

いやいや、そんな事ないよ n 「あるぞ」…え？

玄斗「えつ？」 クルツ

振り向くと、そこには変な雲に乗つた老人がいた。  
…どこからどう見ても神じやねーか。

神「ワシは転生の神じや」

玄斗「そ、そうですか」

相手は神だ、敬語で話そう。

神「お主はどうやら転生すると氣付いたようじやが、理由は分かるか？」

理由…？分からん。

玄斗「適當じやないんですか？」

神「…理由をきいてる時点で適當じやないに決まつてるじゃろうが」

玄斗「ですよね…なら、理由は何ですか？」

神「そうじやな…お主、何歳で死んだ？」

玄斗「えつと…25歳ですね」

神「多分ソレが理由じやな。本来死ぬ時と比べて早すぎたんじやろ」

玄斗「なるほど…」

それなら納得、なのか…？

神「それじやあ、早速転生する場所決めじや…どこの世界がいい？ゲームの世界でも良いぞ」

玄斗「あ、その前に名前つて変えられますか？ちょっとした変更がしたいんですが」

神「？」

玄斗「俺の名前である玄斗の『玄』を『幻』に変えてほしいんです」

神「…それだけか？それならすぐにできるぞ。次は転生先を決めるのじや」

俺が前世で特にハマつてたのはマイクラの某サーバー、東方、アンテだ…マイクラはめちゃくちゃ死ぬだろうし、アンテはセーブ云々が小難しいだろうから：

玄斗「東方の世界でお願いします」

神「よし、東方 p r o j e c t ジャン…次は能力じゃ。能力を1つだけ与えてやろう。

所謂転生特典つてヤツじや」

ゲームといえば、レベル上げなんて言うヤツは少ないだろうな…よし。

玄斗「経験値を得る程度の能力」で

神「ふむ…中々興味深そうな能力じゃの、了解じや。…さて、最後は時期じや。いつがいい?」

折角東方の世界に転生するんだ、原作をぶつ壊したいという願望もある。時間軸の修正力たるものがあつたら話は別だが。

玄斗「月の都が月に移動する130年前ぐらいで」

神「…微妙な時期じやな。何故じや?」

玄斗「多少強くなつてから都に行くので百数年が妥当かと」

神「ほー…よし、設定完了じや。ちょっと待つとれい」

玄斗「分かりました」

神「……」ブツブツ

神様は何かを念じはじめた。

一数分後—

神「…よし、転生するぞ。準備はいいな？」

玄斗「はい！」

ギュイイン…！

俺の周りをエネルギーが渦巻く…

神「いい2度目の人生を送るのじやぞ、三雲幻斗よ」

幻斗「…！」

目が覚めると、俺は森の中にいた。：ん？

幻斗『能力の取り扱い説明書』：神様からか

『経験値を得る程度の能力』

何かを経験することで経験値を溜め、一定値貯まるとレベルアップする。

レベルアップすると身体能力が上がったり、集められる素材が増えたりする。

身体能力云々は一応特訓をしても上げられるぞ、むしろ特訓した方が上がり幅は大き

い。

始めて経験したことは普段と比べて10倍の経験値が得られる。

レベルアップに必要な経験値はレベルの数字を3乗した数値じや。

例：レベル $2 \rightarrow 3$ に上がるには経験値が $2 \times 2 \times 2 = 8$ 必要となる。

幻斗「ふむ、めちゃくちやよくできるな…」

でも経験値とかレベルってどうやつて見れるんだ？

…と思つた瞬間。

『レベル1 次のレベルまであと1』

幻斗「うおつ!?」

コイツ、直接脳内で言われる仕組みなの？

幻斗「……レベルアップしたらどうなるんだ？」

試しに近くにある雑草を引っこ抜いてみる。

『レベルアップ！ 1→2 パワーが10上がった！ 次のレベルまであと8』

パワーって、力の数値みたいなヤツだよな？

幻斗「脳内に再生される形式なのか…」

タイミングによつたらめちゃくちやビックリしそうだな。

幻斗「……よし」

まずするべきことは、素材集めと拠点造りだな。

幻斗「木を殴つてど…」 ポカポカ  
(マイクラかよ!?)

転生してから数日が経ち、俺のレベルは3になつた。

森では果物や木材が集められるし、森を出てみると川があつたので釣りもできるし、近くには洞窟もあるので採掘もできる。立地最高かよ。

幻斗「後の月の都となる都市つて、どこにあるんだろうな?」

生活がひと段落したら旅に出てみるか。

# 都の者と遭遇するまでの百年間

s i d e 三雲幻斗

『レベル5 次のレベルまであと70』

転生してから1ヶ月が経ち、俺は着実に素材を集めていた。

幻斗「よい、しよう」と! ザクツ

ドサツ!

石器の剣や斧、ツルハシを作り、おかげで素材集めが効率的になつた。

幻斗「……石器の次は、鉄だな」

日本に鉄があるとすれば絶対砂鉄だしないや待てよ?

幻斗「それは前世の世界の話で、この世界は別にそんな事気にしなくていいんじやないか?」

なら、鉄鉱石は掘れば見つかるだろ。

幻斗「よし、早速取り掛かるか!」スツ

ザクツ、ザクツ……

(ココまで東方要素がねえ……)

—数日後—

木炭を燃料にした松明で洞窟に明かりをつける。  
そんな状態の道が数十メートルに及んだある日…

幻斗「…ん？」

石の中に1つ茶色く鑄びたような鉱物があつた。

：コレは！

幻斗「鉄鉱石だ！」ザクツ

喜んで鉱石をツルハシで採取した瞬間…

『レベルアップ！ 5→6 新たな鉱石を採取できるようになつた！  
あと216』

一気にレベルアップした。

やはり鉄鉱石のようだ。

幻斗「よし、早速溶かすか！」ダツ

—数ヶ月後—

『レベル7 次のレベルまであと321』

「グオオオオ！」ドッ

ある日森の中、俺は熊さん…ではなく怪獣にであつた。

霧囲気からして恐らく獣の妖怪だ。

幻斗「ハアツ！」ズバツ

鉄の剣で獣を斬りつける。

「グガアアア…！」ドサッ

すると獣は倒れ、やがて動かなくなつた。

：あれ？ 弱くね？ 初バトルがこんなでいいの？

（※別にそれでいいです）

『次のレベルまであと291』

経験値はそこそこつて感じだな。

幻斗「これからはこんなヤツと戦うハメになるんだろうな…」

一また数ヶ月後—

：転生してから1年、俺の進捗状況を振り返る。

レベルは…

『レベル10 次のレベルまであと1000』

10に到達した。いやあ、コレは個人的に頑張ったと思う。

次は素材だ。まず家は石と木材で作っている。道具は基本鉄で、物によつては強化石⋮ 石の強化版を使つていて。強化方法は後書きで。（メタい！）

さらに能力面では…

幻斗「…ハツ！」ギュン

俺はエネルギー・靈力を操れるようになつた。強化素材を作れるようになつたのもコレが原因だ。

幻斗「次は、そうだな…」

銅、銀、金・ダイヤモンドとか見つけたいな。  
あとは俺以外の知的生命体に会うことだろうな。

一数年後—

『レベル15 次のレベルまであと2498』

幻斗「……」タタツ

ある夜、俺は妖獸と戦う為に森の中を走り回っていた。

現在の装備

強化石の剣、鉄の鎧

…その時だつた。

「グルアツ！」

「た、助けて…」

幻斗「…！」ダツ

妖獸の鳴き声と、子供の泣き声が聞こえたのは。  
すぐ現場に向かうと、そこには今にも妖獸に食べられそうな少女がいた。暗いせいか  
顔はよく見えない。

幻斗「せいっ！」ズバッ

「ガアア…」ドサツ

妖獸を剣で瞬殺し、少女を助ける。

幻斗「大丈夫か？」

「あ、ありがとう…」

松明と火で少女の顔が見える：つて、ルーミアじやねーか！

ルーミア「あなたはニンゲン？私はルーミア：妖怪なの」

幻斗「そうか：俺の名前は三雲幻斗。立てるか？」

ルーミア「うん：妖怪なのを驚かないの？」

幻斗「まあな、この時間帯に森の奥にいる少女なんて妖怪ぐらいしかいないだろ？」

ルーミア「…それもそつか」

これが俺とルーミアの遭遇だった。

一数十年後

『レベル50 次のレベルまであと16361』

ルーミアは俺の家付近を闇でフヨフヨするようになつて、かなりの年数が経つ。そして俺は今更老けない事に気付いた…そんな俺はついに。

幻斗「ダイヤモンドだ…！」

洞窟の奥深くを掘り進め、ダイヤモンドを見つけるのに成功した。ツルハシで叩いてみたがヒビも入らないのを見ると、前世と違つてこの世界のダイヤは衝撃にもつよいらしい。

ザクツ…！

『次のレベルまであと1391』

うおつ、一気に経験値が15000も貰えたぞおい：強化金を作つても半分ぐらいなのによ：

幻斗「やっぱダイヤってすげえな」

『レベル95 次のレベルまであと114514』↑おい

さて、転生してから90年だが…

幻斗「100年経つまでにレベル100に到達したいな…」

その為には大量に経験値を獲得できる方法を探さなきやだめだな。

幻斗「強化ダイヤモンドは凄い量だが…」

アレ、俺が持つてる靈力の量から考えるとバンバン作れる代物じやないからな……ん、待てよ？ ダイヤより強い素材：ネザライトがあるじゃねえか。

幻斗「そういえば、こんなモン見つけたんだつたな」ガサツ

俺が取り出したのは、紫色に錆びた金属。どう見ても前世には無さそうな質感をもつ。

幻斗「コイツを金と混ぜればできるんじやね？」

試してみるか…

一数ヶ月後――

幻斗「うーむ、ネザライトはゲットできたものの、経験値は微妙だつたな…ま、強化ダイヤとは別で使えるしいいけどな？」

：俺、ずっと採掘系のことしかしてない気がするな。少しは東方っぽいことをした方がいいかもしねんな。

幻斗「よし…」

ちよつとした旅に出るか！

自宅の位置をマークした後、俺はルーミアに一言言つてから家を出た。

一数年後（合計100年後）――

いやー、色々あつたな。不自然な量のヒマワリがあると思つたら風見幽香がいたし、

でつけえ山には鬼が大量にいたしで、刺激的な旅だつた。

幻斗「ただいま！」

ルーミア「あ、幻斗おかえり。旅は楽しかつた？」

幻斗「おう、楽しかつたぜ」

しかもおかげで…

『レベル100 次のレベルまであと100万』

俺はレベル100に到達した！

幻斗「俺の土産話、聞きたいか？」

ルーミア「うん、聞きたい！」

そして俺はしばらくルーミアと談笑するのだった。

一数ヶ月後—

……100年。

俺はだいぶ強くなつたと思う。幽香と戦つた時は引き分けに持ち込めたし、鬼たちと

戦つた時は勝つことができた。

俺のパワーはかなり高い数値だろうな。…さて。

幻斗「そろそろ都を探しに行くか」

一応大まかな場所は割り出したが、後の楽しみとして敢えて捜しださなかつた。

ガチャツ

幻斗「確かこの方向だな」

スタスタ

「数分後」

この方向に絶対あるハズだ。⋮何故分かるかつて？この方向以外全部行つたことが  
あるからだ。

幻斗「…ん？」

気配を2つ感じる。

幻斗「行つてみるか」ダツ

気配がする方向に進むと⋮

「ハア、ハア…」

「おいおい、もうバテるのかあ？」

銀髪の少女が妖怪に襲われていた。

⋮永琳か？服装と髪型が違うからあくまで予想だが。

「ツ…！」

「まあいい、死ねつ！」ドツ

⋮おつと。

幻斗「させねえよ?」「ズバッ

一瞬で近づき、刀で妖怪を真つ二つに斬る。

「ギャツ…!?

「…!」

妖怪は地面に倒れ消滅した。

幻斗「大丈夫か?」

「はい…貴方は?都の者では無さそうですが…」

幻斗「都の者じやないからな?俺は三雲幻斗だ」

永琳「私は八意××、永琳でもいいです」

ほーん: ××つてマジで聞き取れないんだな。

# 月夜見

s i d e 三雲幻斗

銀髪の少女：永琳に案内され、俺は都に入つた。

俺が見る限り都の文明は前世の文明より少し進んだ状態なのだろう。

幻斗「永琳、俺達は今どこに向かつてるんだ？」

永琳「都のトップ、月夜見様の所です」

：「フア?! いきなりトップかよ!」

幻斗「どうしてそんな所に…」

永琳「実は、都の外で1人のニンゲンが暮らしていることは既に知られていたのです」

幻斗「…え、マジで?」

永琳「はい。そしていい機会なので月夜見様に会わせておこうかと」

幻斗「なるほどな…」

それについても、ずつと気付かれてたとはな…

しばらく歩くと、俺達は大きな建物にたどり着いた。

「何者だ」

門番は尋ねる。

永琳「八意永琳です。お客様を連れてきました」

「…入つてよし」

ガシャン：

門が開かれる。道の奥には階段が見える。

なんつーか、コレがゲームだつたらセーブした方がいい雰囲気だな。

スタスター：

道を進み階段を上がると、そこには大きめの部屋があり、玉座に神々しい雰囲気の女性が座っていた。

「お前が都の外で暮らす者か。名前は？」

幻斗「三雲幻斗です」

月夜見「幻斗か。私は月夜見、この都の都長だ：いくつか質問があるがいいかね？」  
質問？…まあ都の外に人がいたらそりや気になるだろうな。

幻斗「いいですよ「それとタメ口でいい」：分かつた」

月夜見「まず最初の質問だ：お前はどこから来た？」

早速ヤバい質問が来たな。どうしたことか…転生したとバカ正直に答えたらヤバい  
だろうし…よし。

幻斗「遠方の地から来た」

月夜見「ふむ：（私たちはこの都から遠方に出てることがない。まあありえることか…）次の質問だ。お前はニンゲンなのか？数十年前からいるようだが、老けている様子がない」

幻斗「一応ニンゲンだな。ワケあつて不老長寿だが」

不死身なのは死なないと分からぬが、試す気は無いしな。

月夜見「やはりか：一応聞くが私たちと敵対する気は？」

幻斗「ない」

月夜見「そうか。（あつたとしてもそう答えるハズがないだろうな）最後の質問だ：私と手合せしないかね？私は都のトップなだけあって、力には自信がある：だが慢心はいけないのでな、お前の力をみたい」

自信はあるが慢心はしない、いいリーダーのようだ。

幻斗「いいぞ」

月夜見「感謝する。では早速移動しよう」

「移動！」

手合わせをする場所は：建物の地下だつた。戦闘訓練をするための場所らしい。俺は装備を付けて戦闘の準備をする。

幻斗「…よし」

刀、よし。鎧もよし。

ぶつちやけ鎧は重いから素早く動く場合はない方がいいんだよな…軽量化の方法がないか後できいてみるか。

月夜見「準備はいいな?」

幻斗「ああ」

月夜見「では永琳、審判を頼む。時間は5分だ」

永琳「はい」

ギュン

全身と刀に靈力を纏わせる。

永琳「…始め!」

月夜見「……!」ザツ

ドツ!

月夜見がこちらに突撃してきた。

…人は見かけによらないんだな、弾幕で戦うタイプだと思つたが。

幻斗「ツ!」シャツ

キン!

拳と刀がぶつかり合う。

月夜見「…小手調べでパンチをしたが、その必要はなさそうだな！」バツドドドッ！

今度はラツシユかよ！

幻斗「ツ！」

ギツ、キイン！

月夜見の拳を1つ1つ止めていくが、正直きつい。動き速いなおい…！

幻斗「（そろそろ一発入れたいな！）…ハツ！」ギュン

バツ！

刀に靈力を纏わせながら月夜見から距離を取る。

そして強く踏み込み月夜見に刀を振りかぶる。

幻斗「斬ツ！」

月夜見「結界！」ピキッ！

キイン！

幻斗「チツ…」

結界を張れるのか：俺はまだ習得していないからな…：

幻斗「（結界を割るか、範囲外にいくか…）…せいつ！」ドゴツ！

範囲外に出てもすぐ張られるのが目に見えてるので、結界を割ることにした。

月夜見「ほう、割ろうとするのか？させないぞ！」ギュン  
シユバツ！

月夜見から結界越しに弾幕を撃たれる。

幻斗「（相殺するか）とうつ！」シユバツ

シユウウウ：

弾幕を靈力弾で相殺し、再び結界を割ろうとする。

幻斗「うおらあああ！」ギュン！

ピキッ！

結界にヒビが入った……のままいけば割れる！

月夜見「（まずい、このままだと割られる……）フン」スツ  
シユツ

幻斗「!」ヨロツ

何故か月夜見は結界を解除し、俺は勢い余って体勢を崩した……まずい！

月夜見「フンツ！」バツ

ドゴオ！

幻斗「ガハツ……！」ヒュン

バゴツ！

月夜見の拳が俺の腹に命中する。その衝撃で俺は数メートル先に吹っ飛んだ。

幻斗「ツ、凄いパワーだな！」

鬼達ぐらい：いや、鬼を超える力だ：！

月夜見「神力を纏わせて攻撃したから、攻撃力が上乗せされたのさ」

幻斗「ヘツ、だと思つたぜ：！」スクツ

起き上がり、攻撃の構えを取る。

幻斗「スウ：」キツ

月夜見「（その構え、さては技だな？）：結界」ピキツ

：その結界、ぶつ壊して攻撃を当てるやる。

俺は足や腕、刀に靈力を集中させ：：

幻斗「……！」ドツ！

超スピードで月夜見に突っ込んだ。

月夜見「な：（速い！）

幻斗「三雲斬り！」ズバツ

：パリイン！

結界は割れ：：

ザシユツツ！

月夜見「グウツ…！」

月夜見に大ダメージを与えた。

幻斗「…どうだ？」

月夜見「ツ…いい技だな」

ピーツ、ピーツ…

その時、アラームが鳴った。

永琳「…5分が経ちました。結果は引き分けとします」

どうやら時間切れのようだ。それにしても…やっぱり俺はまだまだだな。

月夜見「いい勝負だった、幻斗よ」

永琳「月夜見様の結界を割るとは、中々の力を持つていますね」

幻斗「まあな…月夜見もありがとな、おかげで向上心ができた」

月夜見「それはよかつた」

その後俺はお土産として強化ダイヤモンドを月夜見に渡し、お礼として結界の張り方を教えて貰つた。

# 月への移住計画

s i d e 三雲幻斗

『レベル101 次のレベルまであと50万』

月夜見と知り合い…いや、友達になつてから数年が経つ。

俺は都の技術を色々知ることができ、月夜見は強化素材を製造できるようになった。

ルーミア「幻斗、誰か来たよ」

部屋で刀を研いでいるとルーミアが入ってきた。

…誰かが来た？永琳辺りか？

幻斗「ん？ 今出る」

スタスター：ガチャツ

月夜見「ゞきげんよう」

ドアを開けると月夜見がいた。

…はい？ 自分から來たの？

幻斗「…1人で來たのか？ 護衛とかは？」

月夜見「私は都最強だぞ？ 自身の防衛ぐらいできる」

ですよね：

幻斗「都での仕事は大丈夫なのか」「今、夕方だろう？終わらせてきたのさ」…お、おう。まあ入れ

月夜見「お邪魔するぞ」

仕事終わらせてきてるのがなんか用意周到だな…

とりあえずリビングの椅子に座らせる。

ルーミア「はい、お茶」コトン

月夜見「ありがとう…むつ？」じつ

…あ、そういえばコイツら初対面だな。

幻斗「友達の妖怪、ルーミアだ」

月夜見「ルーミアか。私は月夜見だ、よろしく」

ルーミア「よろしく」

そしてルーミアは部屋を出た。…もうちょっとといてもよかつたと思うぞ？

幻斗「（まあいいか）…んで、どうしてわざわざ俺の家に？流石に行つてみたかつただけじやないだろ？」

月夜見「まあ、な。実は…都の移動を考えているんだ」

…お？こりや大事な話だな。

幻斗「移動つて、遷都だよな？何処に？」

月夜見「…月だ」

：うん、実際に言われると衝撃が凄いな。月に行くなんてスケールが違えし。

幻斗「なんでだ？別に地球でもいい環境だろ？」

月夜見「…理由は2つある。1つめは、文明や技術の進歩において月の方が都合が良いからだ」

ほーん：確かに月には未知なる物質があつたりするかもしれないしな。

月夜見「そして2つめは…妖怪などによる『穢れ』の蔓延だ」

穢れ、か…。

これが原因で月の民が地球人を差別することになる。

幻斗「…なあ月夜見、穢れって何なんだ？」

月夜見「…？（少し威圧を感じる、何故だ？）穢れとは、どの生物にもある所謂『生命力』のことだ。生にしがみつく者ほどそれが多い。穢れがあると寿命たるものができる、永遠は存在しなくなる。生命体のいない月には必然的にその穢れがない、だからそこに移住したいのだ」

その話し方…………かなり差別的な雰囲気がある。

ああまりい、聞かなきやよかつた：怒りそうだ。

幻斗「1つ、質問がある」

月夜見「（何だ：穢れの説明を聞いてから幻斗の様子がおかしくなっている）：答えられる範囲ならいいぞ」

幻斗「その穢れってのは……お前らも持つてるのか？」

月夜見「私たちか：一応あるが、それもじきに無くなるだろう。なんせ都に住む者達は永遠に生きられるのだからな」「でも、生きてるだろうが」：ツ!?（な、なんだこの殺意は!?）

俺は怒りで机を叩いていた。

月夜見「ツ…！（それは盲点だつた…！）

幻斗「月夜見」ギロツ

月夜見「な、なんだ…？」

幻斗「その穢れとかいうゴミ定義、この世から消され

月夜見「それって、どういう「んな定義存在しちゃダメなんだよ！」ツ!?」ガシツ  
俺は月夜見の胸ぐらを掴んでいた。俺が正気だつたらまずこんな事をしないだろう。

幻斗「生きてる時点で穢れがあるんなら、永遠に生きようが寿命があろうが穢れがあるってことだろ!? 何があつても絶対に死なない不死身? んなモンねえんだよ!」

ガンツ!

月夜見を壁に叩きつけた。

幻斗「月夜見、その定義を撤回しなかつたら…お前らが月に行く前に俺が都を滅ぼしてやる!」

月夜見「(そしてこの殺意…本気でやるつもりだ…!) 分かっただ…帰り次第すぐ撤回司令を出す…!」

幻斗「…………ならない」パツ

月夜見から手を離し、椅子に座つて怒りを収める。

月夜見「ツ…」ドサツ

一数分後—

やつと落ち着いた俺が真っ先にやつたことは…：

幻斗「ホントに、スマン…!」ザツ

胸ぐらを掴み、壁に叩きつけた月夜見に謝ることだつた。

幻斗「俺の考えを一方的に押し付けてしまつて…!」

月夜見「…顔を上げてくれ、幻斗。私も気付かされたんだ」

幻斗「……？」

氣付かされた……？

月夜見「まさにお前の言う通りだ、穢れなんて定義は存在してはいけない……怒るお前の気持ちも理解できた」

月夜見は本当に理解したかのような、真剣な顔をしていた。

幻斗「……」

月夜見「私こそ、あんな定義を作つてすまなかつた」

今度は月夜見が謝つてきた。

：分かつて、くれたんだな。

幻斗「……月夜見」

月夜見「何だ……!?」ギュツ

俺は月夜見を抱きしめていた。

幻斗「ありがとな」

月夜見「…………ああ」

|||||

俺が怒った：いやキレた事件から数日後、穢れの定義は撤回され、月への移住の理由は技術進歩の観点のみとなつた。

：そして今日、月夜見は再び俺の家に来ている。今度は俺が誘つたという形で。

月夜見「幻斗、大事な話があると聞いたが：」

幻斗「ああ：俺の生まれについてだ」

月夜見なら話せると思つた俺は、自身の出自を明かした。

一通り話し終えた後、月夜見は納得したような表情をしていた。

月夜見「なるほど：それならお前が初めて都に来た時それほど驚いてなかつたのが説明できる。：それにしても、この世界がお前の前世ではゲームだつたとは」

幻斗「そのゲームにお前は出てないけどな？」

月夜見「私はそんな事気にしないさ：幻斗よ」

幻斗「？」

月夜見「私にそれを話したつてことは、私を信用に値する存在とみたんだな？」

幻斗「…ああ」

月夜見「…フツ、それは嬉しいな」ニコツ

## 32 月への移住計画

：いい笑顔だな。  
そして、月への移住計画は着実にすすんでいった…。

# 移住と防衛

s i d e 三雲幻斗

『レベル101 次のレベルまであと13万1647』

月への移住計画は着実に進み、約20年経つ頃には移住用のロケットや転送装置が完成していた。ロケットは人々の移住、転送装置は物品の移動に使うらしい。

今日は俺とルーミアが都に来て月夜見と話している。

ルーミア「：月夜見」

月夜見「どうしたんだ、ルーミアよ？」

ルーミア「この辺りに妖怪が集まり始めてるの」

幻斗「…そういえば集まつてたな。もしかして都を襲撃するつもりなのか？」

ルーミア「恐らくそう」

そうか…

月夜見「ふむ…襲撃の目的は恐らく技術を盗むことと移住を邪魔することだろうな」

幻斗「かもな…」

前世で呼んでた二次創作で、そういう展開がよくあつたな…

ルーミア 「どう対策するの?」

月夜見 「技術を盗む方は、移住完了した直後に都を跡形もなく消し飛ばすつもりだから問題ない」

幻斗 「何を使うんだ?」

月夜見 「コイツだ」ピッ

月夜見は映像を見せてくる。

実験結果によると半径5キロは跡形もなく爆発するらしい。

都の大きさが確かに半径15キロの円形だから…4、5個あれば範囲全体をカバーできるな。

⋮でも1つ気になる。

幻斗 「一体どこで実験したんだ?」

月夜見 「結構離れた場所でやつたぞ? 確かココから50キロぐらい離れた場所だ。見るとかなり驚くだろうな」

幻斗 「ふーん…んで、問題の邪魔はどうやつて止めるんだ?」

月夜見 「…………」じつ

⋮ん? こつちを見て喋らなくなつたぞ?

幻斗 「…まさか」

月夜見「…お前に頼めないか？」

幻斗「予想はしたが…なんでだ？一応転送装置は人も転送できるんだろう？しかもみんなが移住する前に予め数人が月に行つて転送先を設置するようだし、大丈夫なんじやないか？」

月夜見「一応その手も考えた。だが…そうすると爆破が問題になるのだ。爆弾は時限式だし、転送装置が転送中に爆破でもしたら…」

幻斗「はあ…分かつた。俺が妖怪達を阻止してやるよ。…ただし」

月夜見「？」

幻斗「お前とは今後も関わりたいからな…転送装置を家に設置してくれ」

月夜見「…フツ。そんな事、私が自ら設置するさ。お前は私にとつて初めて初めての友達だからな」

幻斗「…そ…うか」

ルーミア「…むう、私の事も忘れないで」

月夜見「すまない、お前も友達だぞルーミア」

こうして俺とルーミアは都の移住を邪魔する妖怪達を阻止することになった。

作戦はこうだ。  
最初から俺とルーミアは妖怪達を足止めし、その間に都の人々はロケットに乗り移住する。

そして爆弾が爆発する1分前ぐらいに簡易転移装置ことエンダー・パールでその場から離れる。：エンダー・パールはただのニックネーム、実際はガラスの玉に転移装置が組み込まれてるだけの代物だ。効果は同じだが。

カチツ

月夜見「…よし。転送装置の設置が完了したぞ」

幻斗「おつ、ありがとな」

月夜見「…幻斗」じつ

幻斗「？」

月夜見はこちらをじっと見つめている。

月夜見「お前とルーミアは…：絶対死ぬなよ？」

幻斗「…フツ、もちろんだ。じゃないと二度と会えないからな」

ガシツ

俺達は握手をした。

：絶対、守つてやるよ。

――――――

――――

――――

――

そして：移住する日が來た。

月夜見や永琳に別れを告げた俺はルーミアと一緒に都の外で待ち構えている。

ルーミア 「……來た！」

ドドドツ……！

百、千……数万にもなる妖怪の大軍が押し寄せてきた。

「……おう？迎え撃つのは2人だけかあ？」

「お頭、こんなヤツらすぐに蹴散らしちゃいませい！」

「だな。やれお前ら！」

『うおおおおおつ！』

幻斗「…行くぞルーミア！」キツ

ルーミア「…うん！」ゴオツ

俺達の防衛戦が、始まつた：。

S i d e 月夜見

永琳「月夜見様、口ケツトに：月夜見様？」

月夜見

私は都の入り口：幻斗とルーミアがいる方向をみていた。

月夜見「永琳よ、2人にはまた会えると思うか?」

うか？」

月夜見「…フツ、そうだな」

また会おう・友よ。

一一一

s i d e 三雲幻斗

幻斗「ハア、ハア……」

ルーミア「多すぎる、のだ……」

俺達は次々と妖怪を倒していたが數十分して息が上がっていた。全員瞬殺しているがやはり数が多くすぎる！

「そろそろバテてきたようだな！」

「死ねえつ！」バツ

幻斗「ていつ！」ズバツ

「グオッ……」バタン

……だが、やりようはある。

『レベル101 次のレベルまであと4774』

後何体か妖怪を倒せば、レベルアップして強くなれる……コレに賭けるしかない！

幻斗「ルーミア、下がつてくれ！」

ルーミア「ツ、何を？」

幻斗「考えがあるんだ：ハツ！」ギュン

刀：ではなく手に靈力を集中させる。

「んなボロボロの状態で技を使うつもりか？バカめ！」ドツ

幻斗「くらえ…ブルーインパクト！」

…バゴオ！

「なつ…グワア！」

『ギヤアアア！』

一定範囲を攻撃し妖怪を一気に蹴散らす。

幻斗「…グウツ！」ドサツ

ルーミア「幻斗！」

ルーミアが駆け寄ってきた。流石に無理したしな…

幻斗「だい、じゅうぶだ…コレで…！」

ルーミア「何が大丈夫なのよ！無理して技を…！」

『レベルアップ！ 101→102 体力の上限が解放された！

次のレベルまであと

106万1208』

…！

幻斗「よつしやあつ！」ドツ

ルーミア「うわつ!?」ドサツ

「…なんだ？ いきなりピンピンしだしたぞ？」

「頭がおかしくなったのか？」

幻斗「ルーミア、心配させてスマンな。さつき丁度レベルアップしたんだ」

ルーミア「…そうだったのね。でももう無理しないでよ?」

幻斗「ああ…」ギュン

「まあいい…いくぞお前ら!」

『おらあああ!』ドドド

一数分後—

体力が回復してから再び無双を始めた俺達だが…妖怪に囲まれた。  
「くひひ…もう逃げられないぜ?」

…その時だつた。

ピツ：

電子音が辺りに鳴り響く。

「あ?」

「…なんだあ今の?」

ピツ、ピツ…

「また鳴つたぞ!」

「どこから来てんだ?」

…もうすぐか。

幻斗「ルーミア、準備はいいか」

ルーミア「うん」

2人『どうつ!!』ヒュン

「なつ、飛んだだと!?」

この時代の妖怪達は鳥の妖怪以外飛べないのが当たり前だからな…追つてはいな  
いようだ。

ルーミア「よつ」ドサツ

ルーミアは俺の背中におぶさる。

幻斗「よし…うおりやあつ！」

俺達の家の方向にエンダーパールを思いつきり投げる。

…シユバツ！

すると俺達はエンダーパールを投げた方向…さつきまで戦っていた所からだいぶ離  
れた場所に転移した。

…そして。

ドガアアアアン…！

俺達の背後で、都は大爆発を起こした。

| | | | |

|||||

次は恐らく諏訪大戦辺りになるんだろうが、多分數万年後だろうな。原作と違つて今は現代の数十万年前だし、間の期間が広いものは狭くされてる可能性がある。

それまでは…そうだな。

幻斗「ゆつくりするか

ルーミア「そうだね」

# 大妖精と竜脈

s i d e 三雲幻斗

『レベル102 次のレベルまであと97万2624』

幻斗「うーん：（ドナルド風）」

諏訪大戦は一応中立を決め込むつもりなんだが、問題はそれまでの数万年間何をするかだよな：俺、130年しか生きてないしそんな暇つぶしを作るワケがない。

ルーミア「強化素材を作つたりすれば？」

幻斗「一応ソレもやるつもりだ。強化ネザライトを作つたら強化素材コンプリートだしな」

それが終わつたら次は合金を作ることに挑戦する予定だな。

ルーミア「ふーん：私は適当にフヨフヨするかな？」

幻斗「ソレを何十万年もやるのか？」

ルーミア「……」（。 ピ。）

：はあ。

幻斗「一先ずは経験値の為に採掘するか」

ルーミア「私も手伝う！」

「数分後」

洞窟に向かっていると、川のほとりで妖精達が遊んでいるのを見かけた。

ルーミア「：アレは妖怪？」

どうやらルーミアは会つたことがなかつたようだ。

幻斗「いや、妖精だな。自然の化身みたいなヤツらだ」

ルーミア「ふーん」

妖精達の中に大妖精がいたな。後で会つておくか。

ガキツ、ガツ。

ルーミア「えいつ」ガツ

幻斗「よつ：ん？」

コオオオオオ：

今掘つてゐる岩壁の先からエネルギーを感じる。

幻斗「ルーミア、ちよつと下がれ」

ルーミア「?」ザツ

ギュン

幻斗「ブルーインパクト!」バゴオ

ゴゴゴツ…!

波動で岩壁をぶつ飛ばす。その先には…

ギュウウン…

血管のようにエネルギーの管が張り巡らされてる空間があつた。

ルーミア「…何コレ?」

幻斗「コレは恐らく…竜脈だな」

ルーミア「りゆうみやく?」

幻斗「ああ。地球の血管みたいなモノで、コイツが大きく乱れた場所は荒れ果て、生  
命は維持できなくなるらしい」

ルーミア「…何処で知つたの?」

幻斗「月夜見からだな」

正確には地質学の研究者達からだが。

：それにも。

幻斗「コイツに遭遇するぐらい掘つたのか……おつと、乱れてないかチェックしないとな」スツ

俺は手を竜脈にかざし、乱れがないか確認する。

うーむ……

ルーミア「……もしかして乱れてる？」

幻斗「いや、乱れてはないな。ただ、乱れそうになつてる」ギュン  
確かこの状況だつたら……

幻斗「……こうすればいいんだつけな？」ゴオツ

俺は自分のエネルギーを竜脈に流し込んだ。すると……  
ギュルルルル！

おかげで勢いがついたのか、竜脈の流れが改善された。

幻斗「よし」

ルーミア「勢いが良くなつたけど……どんな効果があるの？」

幻斗「作物の育ちが良くなつたり、鉱物ができやすくなつたりと自然に良い効果をもたらすぞ」

ルーミア「つまり、もっと素材が手に入る……？」

幻斗「その通りだ：お？」

『レベルアップ！ 102→103 ベルまであと109万2727』

新たな素材を集められるようになつた！

次のレ

⋮フア！？

幻斗「一気に経験値が手に入つたぞ!?」（。 ピ。）

ルーミア「えつ、どれぐらい？」

幻斗「約100万」

ルーミア「（。 ピ。）

何だよこの異常な量!?

込まっていた。

あつたのは⋮鉱物と手紙。

手に入れる経験値のノルマを越えまくつたので家に帰ると、転送装置から何がが送り

幻斗「おつ：コレは月の鉱物か？」

ルーミア「手紙を読めば分かるんじやない？」

幻斗「だな。どれどれ…」パサツ

幻斗、ルーミアへ

ロケットは月に辿り着き、現在都の復旧作業を開始した所だ。その時に手に入れた鉱物、『エンダライト』を少しずつだがお前に送ることにした。上手く活用してほしい。それではな。

月夜見より

：今復旧作業が始まつたつてことは、結界を張り終えたつてことだよな？忙しい中よく手紙が書けたな…というか。

幻斗「なんで『エンダライト』なんだ？」

返信で質問しておくか。

その後硬度や性質をチェックしてみると、強さはネザライトと同じぐらいで、重量はネザライトより軽いと分かつた。つまり：コイツの方が使えるつてことだ。

幻斗「じゃ、強化ネザライトを作つた後はコイツを強化するか」

コンコン

ドアからノックが聞こえる。：えつ、誰が来たんだ？

ルーミア「はーい」タタツ  
ガチャツ

「アーティスト...」

ルーミア「…妖精？」

ルーミアがドアを開けると、そこには妖精がいた……しかも後で会いに行こうと思つてた大妖精。

大妖精 「えっと、三雲幻斗さんですよね？」

幻斗「そうだが……どうしたんだ？」

大妖精 「あの…ありがとうございます！」ペコツ

…え？ いきなり感謝されたんだが？

幻斗一俺なんかしたか…?」

大妖精「幻斗さんが龍脈を治してくれたから、自然が豊かになつたのです」あー：なるほど。

「でも、なんで俺がやつたと分かつんだ？」

大妖精「…実は私たち、偶に洞窟で隠れんぼをするんです。その時に流れが安定した  
竜脈を見て…幻斗さんがやつたのかと」

幻斗「…凄い思考能力だな」

妖精にしてはかなり勘がいい：と思う。

大妖精「それで、何がお礼をしたいんですけど：」

お礼か：俺は別に竜脈が安定してたら色々と便利だからやつただけなんだがな：そ  
うだ！

幻斗「俺の友達になつてくれ」

妖精達：特に竜脈付近に住む妖精達を味方につけたら結構な助つ人になりそうだし  
な。

大妖精「…え、それでいいんですか？」ポカーン

幻斗「ああ、友達は増やしたいからな。あとタメ口でいいぞ」

大妖精「…うん、分かつた。よろしくね！」ニコツ

幻斗「おう、よろしく」

こうして俺は大妖精と友達になつた。

# ニンゲンと妖怪が共存する集団

s i d e 三雲幻斗

『レベル103 次のレベルまであと83万6031』

幻斗「…よっしゃ！」パアア

都が月に遷都してから約5年、俺はやつと強化ネザライトを作るのに成功した。

：今思うと、武器はエンダライトがいいが、盾を作る場合はネザライトがいいんだよ

な。相手からしたら重い方が防御を破りにくいからな。

『次のレベルまであと73万6031』

経験値は10万だな。

幻斗「よーし、強化ネザライトの刀を作るか」

カン、カン：

一数分後—

：よし。

幻斗「できたぜ！」

早速試してくるか！

|  
　　|  
　　|  
　　|  
　　|

s i d e ルーミア・アビス

妖精「わ〜！」ヒュン

ルーミア「待て〜！」フワツ

私は妖精達と鬼ごっこをしていました。妖精達と遊ぶのって楽しいんだよね。

ルーミア「……ん？」

ザツ、ザツ

フードを被つたニンゲンの集団がこちらを通りかかった。

ニンゲンなんてかなり珍しいね：都と幻斗以外で見るのは初めてじゃないかな？

妖精「なんだろアレ？」

ルーミア「さあ？」

見てみると、集団の1人が大妖精に話しかけていた。しばらくすると大妖精がこちらに駆け寄ってきた。

（大妖精は基本仲良い人には『くん』か『ちゃん』付けで呼ぶ）  
 大妖精「ルーミアちゃん、幻斗くんを呼んできてくれないかな？」

ルーミア「えつ、なんで？」

大妖精「この辺りに村を創りたいらしいの」  
 ⋮確かにそれは呼ばなきやいけない案件ね。

ルーミア「呼んでくるわ」クルツ

タタツ⋮

s i d e 三雲幻斗

ズバツ！

幻斗「ふむ、かなりいい斬れ味だな」

コレなら戦闘もより優位に立ち回れそうだ。

⋮ザツ

ルーミア「幻斗君、ちょっと来てほしいんだけど」

ルーミアが少し困った顔で話しかけてきた。

幻斗「どうしたんだ？」

ルーミア「来たら分かるよ」

⋮あ、そっすか。

幻斗「案内してくれ」

ルーミア「うん」

ダツ：

「数秒後」

ルーミアに案内され着いた場所には：フードを被つたニンゲンの集団がいた。都以外でニンゲンに会うのは何気に初めてだな。

そう思つていると、集団のリーダーらしき人が前に出た。

「貴方がこの地域の主ですか？」

幻斗「一応な。この辺りに村を創りたい、と聞いたが…」

「はい。実は私たち、元々いた村から追われた身でして…」

幻斗「ふむ…」

他の人達の表情を見る限り恐らく悪事で追われたワケじやなさそうだ。

幻斗「理由を聞かせてくれ」

「…コレをご覧下さい」スツ

話している男を含め全員がフードを脱ぐ。すると…

大妖精「…！」

ルーミア「獣の耳や、角…？」

大半の人の頭に猫耳や犬耳、角が生えていたのだ。  
耳はピクピク動いており、角は根元から生えているようなので本物だろう。

「私達はほぼ全員半妖でして…今まで耳を隠したり、角を折つたりしてなんとか姿を隠しながら暮らしていたのですが、それがバレてしまい死刑を言い渡されてしまいまし  
た。しかしなんとかみんなで逃げてきて、今に至ります…」

半妖か…つまり親の片方が妖怪だつたか、妖怪の力を手に入れたかのどつちかだな。  
それと集団の中に数人の妖怪がいるようだ。

幻斗「…一つ質問がある。その半妖は先天的か？それとも後天的か？」

「どちらもいます」

マジか…凄いなこの集団。ニンゲンと妖怪が共存しているし、結束力が高そうだ。

幻斗「分かった。俺、三雲幻斗はお前らがこの地域に住むことを許可する！」ドン！

「…！…ありがとうございます！」ザツ

『ありがとうございます！』ザツ

みんな揃つて土下座をしだした。

幻斗「ちょ、顔を上げてくれ！」

ザツ

…ふう、感謝されるのはいいが流石にこのレベルは耐えられん。

幻斗「…と、そうだった」

俺はリーダーらしき男に目を向ける。

幻斗「お前がリーダーか？名前は？」

天也「基山天也、半人半鬼です」

リーダーの男：天也には立派な角が生えていた。

幻斗「よろしくな、天也」

天也「はい！」

こうしてこの地に村ができた。

|||||

|||

||

村ができて数ヶ月。村人達は洞窟で採掘したり、森で木こりをしたり、川で釣りをしたり、俺が作った稻作をしたりと穏やかな生活をしているようだ。そんな村人達を妖精が手伝う姿も見受けられる。

ルーミア「平和だね！」

大妖精「そうだね」

幻斗「まあ、平和なのが一番だ。当分はこれが続いてくれるとありがたい…さてと、俺はそろそろ特訓を始めるか」

2人『特訓?』

2人を連れて、俺は村のとある場所に行く。

ガチャツ

「あ! 幻斗さんこんにちは!」

「お疲れ様です!」

中では身体能力や靈力、妖力などを鍛えている人々が見られる。…そう、ココは俺が創設した特訓場だ。

幻斗「おうお前ら、今日武器は持ってきてるか?」

「はい、持ってきてます!」

「俺と一戦してください」「あ、ズルいぞ! 俺が先だ!」などと! 俺が先だ!

…仲良いなおい。

幻斗「先着なんてねえから、お前ら同時にかかるとい!」

2人『はい…うおお!』ドツ

…数分後…

「うわっ！」ドサッ

「つ、強すぎます…」

幻斗「ふむ…お前らは仲いいんだから、連携を取ればいいんじやないか？」

2人『あ、なるほど…』

幻斗「次はそれを意識してかかつてこい！」

2人『はい！』

ルーミア「いい師匠してるね」

大妖精「だね」

こうして村の平和な日々は続くのだった。

# 都と村の貿易

s i d e 三雲幻斗

『レベル103 次のレベルまで18万4792』

村がてきてから10年が経ち、規模は段々大きくなっていた。そんなある日、村長である天也が家に訪ねてきた。

天也「幻斗さん、ココから少し離れた所に大きな窪みがあつたんですが…」

幻斗「窪み？」

天也「はい、まるで大きな爆発が起こつた後のような」

幻斗「…ああ、ソレか。都、つて知つてるか？」

天也「都？私達と比べると天と地の差ほどの文明を誇る、あの都ですか？」  
えつ、都つてそんな風に言われてたの？初めて知つた。

幻斗「その都であつてる。実はな…」

俺はあるの窪み：クレーターがどうやつて発生したかを教えた。一通り話し終えると、

天也「おお…！」キラキラ

天也「おお…！」キラキラ

幻斗「…どうした？」

天也「まさか幻斗さんが都長と友達だったとは！ 感激です！」キラキラ  
：何かお前俺のガチファンみたいになつてね？」

天也「しかもあの転送装置が都の技術で作られたモノだつたとは…あつ、ところで今  
でも連絡を取つてゐるんですよね？」

幻斗「まあな。都が月に遷都してから15年程経つてゐるが、どうやら復旧作業は完  
全に終わつたらしい」

天也「へえ～」

その後も天也が質問しまくつてきたので、終わつた頃には日が暮れていた。特訓場で  
あの仲良しコンビを鍛えたかつたのに解せぬ…

一数時間後――

ウイイイン…ゴトゴトッ！

幻斗「ん？…ファ!?」

ちようど夕食の片付けが終わつたところで転送装置から手紙…と大量のエンダライ  
トが送り込まれた。

幻斗「なんだこの量!? 読むか…」

幻斗達へ

私達月の都はお前達の村と貿易をすることにした。これからこの量のエンダライトを毎月を送ることにした。代わりに強化鉄や強化ダイヤを送つてくれないか?これは貿易だからな、対等でないと困る。貿易用で別の転送装置が欲しければ言つてくれ、それではな。

…おう。

幻斗「貿易か?」

それで機械を送らない辺りちゃんとしてるな…ふむ。

幻斗「村のヤツらに言わないとな」

次の日、俺は仲良しコンビを鍛え終えた後村人達を招集した。

天也「幻斗さん、一体どういった要件で招集を?」

幻斗「今回お前らを呼んだのは:コイツを提供したかつたからだ」スツ

俺が出したのは:エンダライトの鉱石。

「…見たことのない鉱石ですね」

幻斗「そりやそうだ。コイツはエンダライト、月で取れる鉱物だ」

「何と!?」

ざわざわ

幻斗「採掘隊、前に出てくれ」

『はい!』ザツ

採掘隊が前に出ると、俺は鉱石を渡した。

「…! 淫く軽い…!」

「金属なのにこの軽さですか…!」

幻斗「エンダライトは軽い上にネザライトと同等の硬さだから農具や武器の軽量化が図れる。しかも強化エンダライトにすればさらにパワーアップだ」  
「ソレは便利ですね!」

「しかし、何故月の代物を幻斗さんが?」

ざわざわ

幻斗「俺が月の都の都長、月夜見と友達なのは知ってるだろ? 昨日アイツが『貿易しよう』って言つてきてな、イイ考えだと思つたワケだ」

「なるほど…」

天也「…ん？ ちょっと待つてください。貿易ってことは私達からも何かを送らなければならぬんですね？」

幻斗「おつ、よく気付いたな。送るものは強化鉄や強化ダイヤだ」

「あつ、強化素材か」

「なら俺達でもできるな」

幻斗「素材自体は今前には採掘隊に集めさせる、それが仕事だからな。それで強化だが…」じつ

「？」

俺がじつと見ているのは：妖精達だ。妖精の一部は村に住むようになつたのだ。

幻斗「自然の権化である妖精達に頼みたい。給料として：そだな、おやつはどうだ？」

妖精達『やる!!』

大妖精「あはは…」

：実に扱いやすいな。

幻斗「エンダライトが送り込まれる転送装置は後日村の指定場所に置くつもりだ。そ

『はい！』

の時から貿易は始まるからよろしくな」

うん、いい返事だ。

一数日後――

そして貿易が始まった。

転送装置は倉庫の近くに置き、送られたらすぐ収納できるようにした。

シユツ

「うわつ、一気に来た！」

「こうやつて来るんですか!?」

幻斗「おう、毎月こうやつて来るぞ」

「えつと、どうやつて強化素材を送りこむんですか？」

幻斗「素材を装置のココに置いてから、このボタンを押せ」

「了解です！」ポチッ

シユツ

幻斗「これからは毎月コレを繰り返す。量の増減とか必要だつたら教えてくれ

「はい！」

――――――

――――――

『レベル110 次のレベルまであと130万1728』

：あれから100年経つた。

強化工エンダライトも作れたり、貿易業は繁盛している。そして村とその一帯はこう呼ばれるようになつた：『夢幻の里』と。

幻想郷と似たような響きの名前だが、俺はこれを結構気に入っている。

：そんなどある日。

大妖精「幻斗くん、凄いものを見つけたよ！」ビュン

大妖精が少し焦ったような嬉しいような表情で訪ねてきた。どうやら洞窟の奥深くにある竜脈に何かがあるらしい。

幻斗「：行つてみるか」

しかし俺はこの時知らなかつた。

大妖精が見つけたものが究極の暇つぶしになることを。

# 時空の歪み

s i d e 三雲幻斗

『レベル110 次のレベルまであと130万1728』

竜脈まで来たが、相変わらず安定しているだけで何も変化は感じられなかつた。

大妖精「ココじゃないよ」

幻斗「?」

大妖精「もつと奥にあるんだ、ついて来て」

スタスタ

竜脈の奥に進むと、そこには大きめの空間があつた。

大妖精「まず幻斗はココに立つてて」

大妖精は空間の入口を指してそう言つた。言われた通りにその位置に立つとビュン！

空間の中にいる大妖精がとてつもないスピードで動きだした！

幻斗「!」

俺が驚いたのに気付いたのか、大妖精は空間から出て戻ってきた。

大妖精 「ふふん、驚いた？」

幻斗 「ああ…」

大妖精 「じゃあ次は幻斗くんが空間に入つて、私は入口で動き回るから」  
今度は俺が空間に入つた、すると…

幻斗 「……は？」

入口の方にいる大妖精がとてもなく遅い動きをしているのだ。表情も変えている  
ようだが不自然なレベルで遅い…もはや止まっているようだ。空間を出て俺はすぐに  
質問した。

幻斗 「まさかこの空間、時間の流れが速いのか？」

少なくとも100倍速にはなつてるハズだ。

大妖精 「多分ね。凄いでしょ？」

幻斗 「ああ…でも逆にできないか？」

そうすればかなり便利なんだが…

大妖精 「逆つて？」

幻斗 「空間にいる間は逆に時間が遅くなるんだ」

大妖精 「あ、そういう事ね。確かにソレもできたら面白そうだね」

幻斗 「一先ずは実験と様子見だな」

大妖精「だね」

空間：名付けて『時空の歪み』でいくつかの実験をした。壁を掘ることで空間を広げたり、逆に何かで埋めることで縮めたり…結果はどちらも成功だつた。壁が繋がつている空間である限り歪みが生じるようだ。

このことについて数日前月夜見に手紙で伝えたが…そろそろ返答が来るだろう。

ウイイイン…ゴトン

幻斗「…ん？」

ルーミア「…ボール？」

手紙と丸っこいドツヂボールサイズの機械が送り込まれた。手紙は返信だからいいとして…何だコレ？

幻斗と仲間達へ

その空間について、私には心当たりがある。月でも発生した現象だが、恐らく竜脈の

エネルギーでそこだけ時間の加速や遅速ができるようになるハズだ。手紙と一緒に送ったその機械はエネルギーの量を調整するための機械だ、『時空の歪み』の中心に置いてくれ。詳しくは説明書を読むんだ、それではな。

月夜見より

ほーん：コイツで時間を調整できるのか。というか、竜脈のエネルギーによつて時空つて歪むんだな：月の都でもそういうモノがあるからこの機械ができたんだろうが、研究が進んだら詳しく教えてほしいもんだな。

幻斗「まずはコイツを空間の中心に置けばいいんだな？」ゴトッ

説明書は…と。

### 歪み調整システムの取扱説明書

- ①この機械が調整できる倍速範囲は365倍～0.0365倍まで。
- ②倍率はシステムにある操作盤で調整できる。  
以上。

365倍は外の1日で中は1年、0.0365は外の1年で中は1日つてことか：それにも短い説明書だなおい。

ルーミア「それってつまり、この空間を1番遅い倍速にしてから一ヶ月過ごすと外では30年経つてるってこと？」

幻斗「そういうことだ。フフツ、こりやかなり便利な代物だぞ？」

数万年の時間がたつたの数百年になるんだからな。まさに究極の暇つぶしだ。ドラゴンボールの精神と時の部屋みたいだな……365倍速なのも同じだしな。

幻斗「村人達に話すか」

村人達に時空の歪みの事を伝え、許可制で使用できる場とした。

流石に共用にすると倍率の大きさでケンカになつてしまふかもしれないからな……倍率を分けることができるようになつたら考えよう。月夜見に頼んだがその内来るだろうし。

「幻斗さん、使用していいですか？」

「あ、俺も！」

仲良しコンビが許可を取りに来たようだ。

幻斗「ああ、2人ともいいぞ」

2人『ありがとうございます！いくぞー！』ダツ  
⋮仲いいな。

そう思つていると、天也がこちらにきて話しかけてきた。

天也「そういうえば幻斗さん、時間制限は設けないんですか？」

幻斗「倍速した状態でどうやつて設けるんだよ？時計なんて置いても意味ないぞ？」

天也「⋮あ、確かに無理ですね」

幻斗「まあ、やりようはある。倍率を遅くするたびに使える時間を短くすればいい。

例えれば最遅で1時間、その倍の速度で2時間⋮つて感じでな？」

天也「なるほど…」

s i d e 月夜見

私は時空の歪みの空間を分けられるようにしてほしいという幻斗の頼みを聞き入れ、私達も必要になりそうなので研究に集中していた。⋮あくまでも研究しているのは研

究員達で、私は都長として書類と格闘していただけだが。

そんなある日、都長室へ研究員が駆け込んできた。

ガチャッ

「月夜見様！例の物が完成しました！」

月夜見 「本当か！」

ピッ

研究員は映像を見せてきた。

映像は月にある時空の歪みでの実験の様子で、ガラスのような透明な物を張った状態で分けた空間でそれぞれ倍率を変えて調査してみると…見事に全て正常に動いていたのだ！ガラスのような物の名称は…『時隔ガラス』のようだ。

「しかも、竜脈によるエネルギーが何故時空を歪めるのかが少し判明しました。どうやら竜脈のエネルギーは神力と似たような性質を持つており、何かを創造する力があるようです」

月夜見 「ふむ…分かった、今後も研究を頼むぞ。そして早速夢幻の里に物資を送れ！」

「はい！」 サツ  
ガチャッ

月夜見 「…恐らく、幻斗はこれから時空の歪みにこもるだろうな」

定期的に出るとしても、時間の大半はそこで過ごすハズだ。

月夜見「次に会えるのは当分先の話になりそうだ」

――――――

――――

――――

――――

s i d e 三雲幻斗

月の都から送られてきた『時隔ガラス』を張り終え、時空の歪みは分けた空間でそれぞの倍率を設定できるようになつた。⋮そして俺はこれから、ココで時間の大半を過ごすことにした。

幻斗「天也」

天也「はい」

幻斗「俺がいない間、里を頼むぞ」

天也「⋮任せてください」

幻斗「よし。それじゃあな」

天也「偶には戻ってきてくださいね?」

幻斗「ああ…」

そして、俺は時空の歪みで最遅倍速に設定し…特訓に励むのだった。

# そしてかなりの年月が過ぎた

s i d e 三雲幻斗

『レベル361 次のレベルまであと4433万2211』  
五万年。

この期間の長さはニンゲンにとつては途方もないものだろう。  
しかし俺はそれを…时空の歪みで過ごした。百年おきに村へ様子を見に行つたりしたが、大半は时空の歪みだ。时空の歪みでひたすら素材の強化や特訓を行い、俺は気付いたらレベルが361になつていた。

そして俺は…いつの間にか梦幻の里の神になつた。

幻斗「いやなんで!?」

村に戻ることはちよくあつたが、俺が神になつてゐるなんて一言も言われてない  
ぞ!?

「幻斗さん!」

「やつと特訓が終わつたんですね!」

幻斗「おお、久しぶりだなお前ら!」

俺の事を知つてゐる妖怪や妖精達に歓迎されて俺が着いた場所は…神社だつた。

### 『三雲神社』

看板にはそう書いてあつた。

「この神社では、幻斗さんを祀つてゐるんです」

幻斗「は、はあ…」

：言われてみれば、確かにある時から俺は神力が使えたな。もつと早くに気付けばよ  
かつた。

幻斗「ちなみに、巫女とかいるのか…？」

「いますよ。半妖が代々巫女をやつてます」

マジか…：

神社の鳥居をくぐり、階段の前までくる。

「この階段の先には里長がお待ちしております」

里長：天也か。百年前に会つたが、忙しそうだつたな。  
そう思いながら階段を進むと…：

『幻斗さん、お帰りなさい！』

ワアアアアツ！

村人たちが総出で祝つてくれた。

俺に会つたことのないニンゲン達もそこにいた。ニンゲンと妖怪の共存は続いてる  
ようでよかつた。

人混みの中から天也とルーミア、大妖精が出てきた。

天也「幻斗さん、お久しぶりです」

ルーミア「5万年経つても外見は変わつてないようね」

大妖精「力は相当上がつてるみたいだけどね」

幻斗「フツ、まあな。久しぶりだなお前ら」

その後神社で大きな宴会があつた。

みんな盛り上がつていて、本当に楽しかつた。

「こんにちは！」

巫女服を着た猫耳少女がこちらに來た。

幻斗「お前が三雲の巫女か？」

「はい！」

元気そうだな。

幻斗「…なあ、俺の神としての力つて何なんだ？」

「えつ…知らないんですか？」

幻斗「ずっと特訓してたモンでな」

「なるほど：色々ありますよ？ 豊作だつたり、運気アップだつたり、健康に過ごせたり」

幻斗「あ、そういうモノなんだ」

なんかこう：平和だな。（小並感）



俺の自宅はルーミアが住んでいたようで、俺の部屋も整理されていた。  
転送装置を見てみると何もなかつたので、恐らくルーミアが月夜見と連絡を取つていたのだろう。

幻斗「つと、戻ってきたと言わないとな」カキカキ

月夜見がこの手紙を読んだ途端、すつ飛んでくるだろうな。

手紙を書き終え、転送装置にぶち込んだ。

ー次の日ー

月夜見「お前が予想した通り、すつ飛んできたぞ。久しぶりだな」フワツ

幻斗「

親方、空から女神が！（白目）

⋮つて

幻斗「月から飛んできたのかよ！それと久しぶりだな！」

ホントにすっ飛んできたり、しかも転送装置じゃなくて空から来たりでマジで反応に困るんだが！？

月夜見「ふむ、お前も神になつたようだな。私はお前に会つた時からそうだつたが」

幻斗「そ、うだつたな……んで、何から話す？」

2人『……』

正直話したいことが多すぎる。

⋮よし、まずは。

幻斗「何だ、その服？」どーん

だつて会つてた時や写真で映つてる時着てる和風の服ではなく、スーツなんだぞ？神がスーツ着てるんだぞ？

月夜見「ああ、コレか。実は現在月の都ではこのスーツが流行つていてだな、私もハマつたのさ」

幻斗「お、おう……」

月夜見「次は私からだな。お前の力はどれ程強くなつた？私も鍛えたから強くなつて

いるが、それ以上にお前の上がり幅が見たい」

幻斗「そうだな：五万年前と比べたら軽く百倍は強くなつてゐるハズだ」

だから五万年前の風見幽香は瞬殺できるな、今はできないだろうが。

幻斗「：あ、そういえば。月の都でスーツが流行つてるのは分かつたが、文明つてどうぐらい進んでるんだ？」

月夜見「文明？都民はかなり長命だからか発展はゆっくりとしたものだつたが、他の惑星に行き素材収集ができるようになる程には発展してゐるな」

幻斗「おお：それは凄いな」

完全に東方の世界観から外れているが。

その後も俺達は互いに質問をし続け、終わる頃には日が暮れていた。会つたのは朝なのにな：時間が経つのは速いモンだ。（説得力マシマシ）

どうやら月夜見は現在休暇中のように、数ヶ月は里にいることができるそうだ。：休

暇を数ヶ月もいきなり取れるのかよ。

月夜見「幻斗、お前にコイツを見せたい」スツ

月夜見が出したのは：非常に細かい糸のようなものだつた。

幻斗「何だコレ？」

月夜見「フェムトファイバーといつてな、最近生み出された纖維だ。非常に細かく丈夫なのが特徴で、コイツ一本は肉眼では見えないクセに、強化鉄の斧を振つても切れない程だ」

幻斗「ほーん：凄く強い纖維なんだな」

月夜見「ああ、だから服に編み込んで鎧の代用品にしたり、銃などの武器の威力を何倍にも上げることができる」

幻斗「…ん？待てよ。そんなに強い纖維、一体何からできてるんだ？」

月夜見「超強化エンダライトだ」

幻斗「なるほどな：つて超強化エンダライトだと!？」

そんなカンタンに言うなよ!？」

ケンカ？倍にして買つてやるよ

s i d e 三雲幻斗

俺が戻つてきて数週間、村の様子を見るにもはや町だと氣付いた今日この頃。俺は月夜見と村の茶店で団子を食べていると…

「幻斗さん！」ダッ

店の外から一人の半妖が駆け込んできた。外見から見るに門番のようだ。

幻斗「どうした、そんな慌てて」

「大変です！夢幻の里に神の使者が現れましたツ！」

(プロリーキャ画のオマージュ)

幻斗「神の使者？どの神のだ？」

俺と月夜見はどうちも神なんだが？

「曰く、大和の国からだそうで：里長も先に向かつております」

えつ、ココも乗つ取るつもりなのか？里の情報で諏訪の国が乗つ取られたのは知つてたが：

幻斗「よし、俺が出向く。お前は仕事に戻れ」

「分かりました！」ダツ

月夜見「大和の国つて、ここらで最も大きな国だろう？」

幻斗「そうだ。そこからの使者が来たつてことは…恐らく乗つ取るつもりだろうな。ま、行かないと分からんからさつさと行くか」

月夜見「だな」

一里の門付近

門付近に行くと、そこには天也と弥生人がいた。まあ今は弥生時代だしおかしくないだろう。

天也「幻斗さん、こちらが大和の国の使者です」

「貴方は？」

幻斗「この里の主、三雲幻斗だ」

「そうですか…それでは大和の神々からの伝言を。この領地と人民をこちらに譲渡せよ。そもそもば戦争だ、とのことです」

…ふむ。明らかにケンカ売つてるな。

幻斗「…分かつた。大和の神々に伝えておけ：俺達は領土をやるつもりはない、戦争がしたいのならかかつてきな。諏訪の国のようになると思うなよ、と」

実を言うと、

「……!? 正気ですか!?」

幻斗「ああ…」

「わ、分かりました。今の言葉、神々にしかと伝えておきます「それとだ」…?」

幻斗「普通のニンゲンに見えるヤツを侮らない方がいいと思うぞ?」ゴゴゴ  
軽く威圧を出して威嚇する。

「ツ…は、はい」

幻斗「行け」

「失礼しました…!」ダッ

使者は急いで帰つていった。：威圧、出しすぎたかもな。

月夜見「さつきの使者、私のことを完全に無視していたな」

天也「ですね：何故でしよう」

幻斗「多分、お前が俺の連れかなんかと勘違いされたんだろうな」  
しかも出会い頭に『貴方は?』ってなんだよ、クソ失礼だなおい。

幻斗「月夜見、俺と協力してくれ。大和の国の神々をボコボコにするぞ」

月夜見「無論だ、私達は親友だからな」

：フツ、それは言われて嬉しいな。

幻斗「ありがとな。：天也、この里に戦える戦力はどれくらいいる?」

天也「村全員とその外に住む妖怪と妖精なので…数千人です。全員靈力や妖力を操れます」

幻斗「ここ数日で戦争が始まつてもおかしくない、準備に取り掛からせろ。行つてい  
いぞ」

天也「分かりました、失礼します！」ダツ

里の住民達には兵士の捕縛を担当さて、俺と月夜見などの強者は役人や大和の神々を倒す。：何故殺さないのかつて？悪いのは兵士ではなく支配しようとしている神々な  
ど、そうした方が『手加減された状態で負けた』と思わせメンタルを折ることができ  
るからだ。

このことを月夜見に伝えると、彼女は納得したような表情をする。

月夜見「なるほどな…お前、中々考えるじやないか」

幻斗「前世で見たことのある策だ、大したことない」

月夜見「…しかし、そんな大胆な策にでるとは自分と住民の力に相当自身があるよう  
だな」

幻斗「そりやそりや、ニンゲンはともかく妖怪や半妖、妖精は俺が鍛えたんだぜ？」  
ニンゲン達も力を見てみたが結構鍛えられていたしな。

月夜見「ふむ…そうか。まあ私も負けるとは思わないな」

幻斗「だろ？」

今回の戦争は：練習試合みたいなモンだ。後により大きなものがあると俺は考えて  
いる。

――――――

――――

――――

――

？

開戦はどうやら1週間後のように、俺は村に召集をかけていた。

幻斗「今日から時空の歪みを共用の場とする。戦争に備えて特訓をするんだ、いいな

『はい！』

幻斗「いい返事だ：次に協力者の紹介をする。月の都の都長：月夜見だ！」

月夜見「ごきげんよう

ワアアアア！

歓声が上がる。そりやそうだ：美女が味方になるんだ、喜ぶに決まってる。  
「凄え！予想はしてたけど月の女神を味方につけるのは流石幻斗さんだぜ！」

「美しい……」

「月夜見様がいれば百人力だぜ！」

…今思うと、俺つてなんでさん付けで呼ばれてるのか分からんな。月夜見は様付けなのに。

幻斗「召集は以上だ、月夜見が味方だからといつて特訓を怠るなよ？」  
『はい！』

幻斗「そんじや解散」  
ぞろぞろ：

月夜見「…それにしても私が出た時、凄い歓声だつたな。私がココにいることは既に知られているハズだが」

幻斗「お前が美女で強いから。そんな単純な理由だ」

月夜見「えつ…そんな理由なのか？」

幻斗「おう」

月夜見「…………私、美女なんだな」

幻斗「そこかよ!?」

前回も今回も俺のツツコミがオチになつてるんだが!?  
(メタい!)

# 夢幻大戦①

s i d e 三雲幻斗

そして1週間後、俺は里の住民を引き連れて大和の国の兵士を待ち構えていた。絶対相手を殺さないという作戦は既に伝えてある。

大妖精「…幻斗くん、私達は絶対勝てるのかな？」

幻斗「心配するな、俺達は絶対勝つ。そうだろお前ら！」

『オオオツッ！』

幻斗「…な？」

大妖精「うん…心配してゴメン」

幻斗「別にいいさ…おつ」

月夜見「！」

ルーミア「！」

大妖精「…！」

天也「…？」

俺、月夜見、ルーミア、大妖精、天也が何かに気付いた。

他にも辛うじて気付いた人はいるようだ。

5人『来る…!』サツ

幻斗「今だ！結界を張れ！」

ピキイツ！

一斉に結界を張つたその瞬間…

キラツ

「何だアレ…?」

光？』

空から何か光つた物が見え…

ヒュルルツ…！

それは矢となつて降り注いだ。

「うわっ！」

「幻斗さんが結界を張れと言わなかつたらくらつていた…」

…よし、防げたようだ。

「ほう、今のを防ぐか

空から誰かが舞い降りてきた。神々しい雰囲気を醸し出していて、背後から後光が光っている。

月夜見「…姉上」

天照「あら、月夜見。月の都にいると思ったんだけど…この里の味方をしているのね」

月夜見「まあな…姉上に負けるつもりはない」

天照「そう…」

幻斗「お前が太陽神、天照大神か」

天照「その通り。私は大和の神を治める八百万の神の一人、天照大神よ…あなた達はせいぜい足搔くといいわ」スツ

天照はそう言つて再び宙に浮き…司令を出した。

天照「我が兵士達よ、夢幻の里を制圧せよ！」バツ

『うおおおおお！』

前方に兵士の大軍が見える。

幻斗「…お前ら、行くぞ！」

『オオツー』

ドドドドド…！

こうして戦争…夢幻大戦は始まつた。

――――――――――――

——|——|——|

s i d e 基山天也

天也「ハツ…！」ゴオツ

私は鬼としての力を解放し、妖力を拳に纏う。

「隙だらけだ！」

その間に私は兵士に囮まれたが：問題ない。

天也「粉碎撃！」ギュン

ドゴオ！

地面を殴ると、技名の通り辺りは粉碎され地面には亀裂が走る。

「なつ…!?

「うおっ！」

兵士達は体勢を崩す：今だ！

天也「せいっ！」シユルル

妖力で縄を作り、兵士達を縛る。相手を傷付けずに行動不能にするにはコレが一番手っ取り早い。

「おわっ!?」

「は、離せ！」

天也「離すつもりはないさ…じや」クルツ

「あ、待てーーー！」

s i d e 大妖精

大妖精「妖精たち、力を合わせるよ！」

『うん!』

ザツ!

「たかが妖精がニンゲンに勝てると思うなよ！」ドツ

「やつちまえ！」ダツ

私達を侮っている兵士達が突撃してきた。

確かに本来妖精はニンゲンの兵士一人より弱い…でも私達は違う！

「やあっ！」

「ぬう!?（何だこの強さは!?)」

そもそも私達は竜脈の影響で自然が豊かになつてるので元々他より強い。

「てやあ！」

「ふざこつ…?」

「何だ、コイツら…武術を使う妖精なんぞ見たことねえ！」

しかも里の住民として鍛えてるので力がさらに上がっているんだ。

大妖精「今日、君たちが教訓を得るとしたら…」スツ

シユバババッ！

刀を構え、そよ風のように舞い葉先のように刺す動き（？）で兵士達をなぎ倒す。

大妖精「私達妖精を舐めないことだね！」ドン！

「グツ…クソツ…！」バタン

大妖精「戦いはまだ始まつたばかり…油断は禁物だよ！」

『おお！』

s i d e ルーミア・アビス

ルーミア「ナイトバーード！」

ゴオツ！

闇の鳥を生成し、敵兵に飛ばす。

「ツ！」サツ

しかし避けられたようだ…ま、今のは囮だけど。本命は…敵兵の足元だ。

ルーミア「つつかまーえたつ！」ガシツ

「なにつ!?」

「何だこの黒い物体は!?」

ルーミア 「闇」と言つても理解してくれないだろうね。うーん…君達を縛るもの、でいい?」

「いいワケないだろ!」ブンブン

敵兵達は縛りを解くために必死にジタバタしているが…もちろん意味はない。普通の縄じやあるまいし。

ルーミア 「あ、そうだ…そこの木の裏に隠れている神様は出て来なよ」

「…バレたか」スツ

大和の国を治める神々の1人が現れる。

「妖怪はニンゲンに恐れられ、滅されるべき存在…そんなヤツらがニンゲンと共に存するなど愚の骨頂! 成敗してくれよう!」ギュン  
ドツ!

…はあ、この神はどうやら妖怪を偏見しているタイプのようだね。ニンゲンにも善悪がいるように、妖怪にも善悪がいるという考えに到達できない。

ルーミア (つくづくムカつく相手だね) スツ

「覚悟オ!」シャツ

神は剣を振るつてきた。しかし私はソレを…

ルーミア 「よつ」 パシツ

片手で掴んで止めた。掴まれた剣は動かなくなつた。

「な…!」

恐らく剣は妖怪特効の聖剣だつたのだろう…しかしそんな剣も。

ルーミア 「神力を纏つて止めれば問題ないのさ！」 バキツ

「妖怪が神力だと!?」

実は私、闇に封入する形で幻斗から神力を借りていたのだ。操れるようになるまでは手こずつたけど、こうして攻撃を防げるようになったから問題ない。

ルーミア 「何の神かは知らないけど…」 ギュン

ドゴオ！

「グハッ…」

ルーミア 「偏見というものは神をも凌駕する仇となるよ」 ドン！

バタン

私の言葉を最後に、神は地面に倒れ氣絶した。

借りている神力には限りがあるから、できるだけ丁寧に使わないとね…！

s i d e 三雲幻斗

俺は月夜見と並んで…敵の総大将である2人の神と対立している。月夜見の姉であ

り太陽神の天照と、戦いの神である戦神・八坂神奈子だ。

天照「神奈子、私は月夜見をやるわ」

神奈子「…分かつた、私は三雲幻斗をやるとしよう」  
相手は一対一に持ち込もうとしている。

2人『そうさせると思つてゐるのか？』

天照「？」

幻斗「コレは戦争だぜ？ 決闘じやねえ…」

月夜見「お前達の都合で戦況をカンタンに変えられると思うな」

神奈子「…ほう？」

天照「つまり、私達2人を同時に相手すると？」

幻斗「さあな？ もしかしたら…」スツ  
…ドゴツツ！

神奈子の背後に2発の蹴りが入る。

『とりやあーつ！』

神奈子「ぐつ…！」

幻斗「俺達全員、対お前らかもな？」

## 夢幻大戦②

s i d e 三雲幻斗

神奈子「ツ…卑怯な！」

月夜見「今は戦争中だぞ？しかも仕掛けたのはお前らだ。卑怯な手をされても自業自得だろう？」

幻斗「お前ら、下がつてろ。不意打ちは成功だ」

2人『はい』サツ

天照（また不意打ちをされるか分からぬ、どうすれば…）ゴクリ  
…さて。

幻斗「いくぞ、月夜見」ギュン

月夜見「ああ…」ギュン

ドツ！

神力を纏い、何か考えている天照に向かつて突撃する。神奈子は一旦無視だ。  
天照「…光の結界！」ギュン

ピキッ！

天照は対策として結界を張る。…突き破つてやるよ！  
シャキツ！

懷から刀を出し、先端に神力を集中させる。

月夜見（そういう策か、なら私は少し遅れて攻撃するとしよう）サツ  
俺の策を察したのか、月夜見は少し後退する。

天照「…？（月夜見が下がった？何故かしら？）」

幻斗「くらえ…三雲斬り・刺！」ズドツ

…パキツ！

天照「な…！」

パリイン！

この刺突技は結界を破るように作つた技だ…ちゃんと役割を果たさせていてよかつた。

天照「私の結界が…「驚くヒマはないぞ」…ツ！」

月夜見「ムーンフォース！」ギュン

…ドゴオ！

天照「かはっ…」

月夜見の拳は天照の鳩尾に命中する。ダメージはそこそこ入つたようだ。

神奈子「天照！…………むつ！」スツ

：チツ、バレたか。

ゴオツ！

神奈子は不意打ちをしようとする俺に気付いたのか、御柱を大量に飛ばしてきた。邪魔だなおい！

幻斗「ブルーインパクト！」

バゴオ！

とりあえず全部ぶつ飛ばす。

神奈子「せいっ！」ゴツ

ヒュン！

しかし全部ぶつ飛ばした直後に真正面から御柱が飛んできた。しかも神奈子が直接押し込んでいるのでぶつ飛ばしたら勢い余つて神奈子の拳が俺に当たる：ふむ、どうしようか。

幻斗「…そうだ！」スツ

ガシツ！

俺は御柱を掴み：

ググツ…！

神奈子「…わつ！」

幻斗「どうりやあつ！」 ポイツ

それを押し込んでいる神奈子ごと地面に向かつて投げ飛ばした。  
：ズドオン！

神奈子「グフツ」ちーん

神奈子は御柱に押し潰された。自爆してゐるな。

幻斗「…つと、月夜見を手伝わないとな」

と思つて振り返ると…：

月夜見「オラオラオラオラアツ！」

天照「ちょ!? 待つ…ぐえつ!?」 ズドツ

月夜見が天照にラツシユをお見舞いしてゐた。：心なしか天照がボコボコにされて  
いるように見える。

幻斗「月夜見、手伝うぞ」

月夜見「むつ？…ああ、助かる」

天照「…まさか、神奈子は…！」

幻斗「自分の攻撃によつてダウンしてゐるぞ？」

天照「えつ？」 ポカーン

：なんかコイツ予想外の事が起きたら隙だらけになるな？

月夜見「隙あり！ムーンフォース！」ギュン

天照「ツ！（その技はくらいたくない！）ていつ！」ドツ  
⋮ズドツ！

月夜見の拳と天照の拳がぶつかり合う。⋮一対一だつたら拮抗状態だつたろうな。

幻斗「三雲斬り！」シャツ

天照「むつ…たあつ！」サツ  
キイン！

俺の刀を天照はもう片手で受け止めた。1人で2人の攻撃を止めているからか天照の表情に疲れが出始める。⋮今だ！

2人『てやあ！』ドツ

天照「きやつ!?」ズドツ

一気に力を入れ、天照に攻撃を入れた。

月夜見「どうだ…？」

天照「痛いわね…でもまだ戦えるわよ！」ザツ

天照はそう言つて体勢を整える。

幻斗「…お前の姉、しぶといな」

結構本気で攻撃を当てたが、天照からは本当にまだ戦えそうな感じがする。体力多す

ぎだろ。

月夜見「まあな。元々私たち3人の中では姉上が1番体力があり、それと僅差で2番目が須佐男、そしてダントツで私が下だった…そんな私も5万年でだいぶ改善したがな」

…マジか。月夜見の体力が少ないので聞いていたが、ダントツだったとは。てか須佐男は天照ぐらい体力があるのかよ。

幻斗「…ん？」

ふと地面を見ると、神奈子が御柱をどかして某火の鳥のようにこちらを睨みつけていた。

神奈子「（あんなマヌケな攻撃で私がやられるとは、プライドが許さん！）…野郎、ぶつ殺してやる！」

おいおい、軽くキャラ崩壊してないか？…とりあえず煽つて自爆に追い込むか。

幻斗「自分の攻撃に当たつてダウンするつて、ねえどんな気持ち？ねえ今どんな気持ち？」ニヤニヤ

月夜見（…えつ、何だその表情？）

今の俺は結構キモい笑みを浮かべていると思う。んで反応は…：

神奈子「…フフ、フフフ」ブチツ

：おう、完全にキレてらつしやる。作戦成功だな。

神奈子「ぶつ潰してやらあ！」ゴオツ

ズドドドドドツ！

大量の御柱が俺達めがけて飛んでくる。：もちろん天照も巻き込んで。

天照「ちょ、神奈子!? 私がいるのよ!? ……わつ!!」サツ

神奈子「潰す潰す潰す！」

天照（あつ、コレは聞こえてないわ〜）

月夜見「おい幻斗、ヤツを暴走させて何をするつもりだ!? 姉上を巻き込むにしては危ないぞ!!」

幻斗「…よく見ろ、アイツは今周りが見えてない」

月夜見「周り? ……むつ」

ルーミア「…………」スツ

天照「(近くに敵が!) 神奈子! 敵が貴女を…」

ルーミア「…！」ギュン

カツ!

ルーミアは妖力を纏い、神奈子の頸に手刀を当てた。

神奈子「ガツ…」バタン

すると不意を突かれた神奈子は地面に倒れ氣絶した。

天照「神奈子？」「隙あり！」：ツ！」

一気に決める！

幻斗「ブルーインパクト！」

月夜見「ムーンフォース！」

ズドオン！

天照「ツ…きやつ！」バゴツ

天照はとつさに防御しようとしたが間に合わず、俺達の攻撃をモロにくらつた。

天照「グツ…ハア、ハア…」

しかし天照は辛うじて立っていた。：コレ以上やつても意味ないだろう。警戒を解かず、俺は天照に話しかける。

幻斗「どうする？お前はもう戦えないぞ？」

月夜見「軍を引き上げてくれ、姉上」

天照「ツ、分かつたわ：我が兵士達よ、夢幻の里から撤退せよ！」

しーん

天照「…えつ？」

幻斗「どうやら住民達は上手くやつたようだな。お前の兵士と神達は：全員氣絶、ま

たは捕縛されている」

月夜見「誰1人死んでないだろうな。後で数えてみるといい」

天照「…！それって「つまり、今動けるのはお前だけだ」…ツ、私達の完敗ね…」スツ

天照は懐から白旗を揚げた。

幻斗「…よし。お前ら、俺達の勝利だ！」

『オオオオオツ！』

天照（この里の人々は…凄いわね）

こうして、夢幻大戦は俺達の大勝利で幕を閉じた。

# スキマ妖怪

s i d e 三雲幻斗

夢幻大戦が終わり、住民達は休養の為それぞれの住居へと帰つていった。大和の兵士達と神々は天照が全員転送した。

天照「侵略は失敗した：だからこの里にはもう手を出さないわ」

幻斗「ああ、そうしろ」

天照「ま、また宣戦布告してきたとしても受けて立つが。

幻斗「それとだ、俺達に負けたからには言う事を聞いてくれよ？」

天照「え」

幻斗「当たり前だろ？こつちにとつちや負けたら住んでいた場所が奪われてたんだぜ？勝つたら勝つたで対価がなきやダメだろ：それとも今度は俺達が大和に国に攻め込むがそれでいいか？」ギロツ

俺は少し威圧を出しながら天照を睨みつける。

天照「：分かつたわ。何をしてほしいの？」

幻斗「そうだな：決めたらお前に連絡する、それでいいか？」

天照「ええ…」

幻斗「ふむ。…もう話すことはないしな、帰れ「待て」…月夜見？」  
天照を帰そうとした所を月夜見に呼び止められた。

月夜見「姉上、ちょっとそこに立て」

天照「？」

何をするつもりだ？と思つていると、月夜見は拳に神力を纏い…  
月夜見「…………歯を食いしばれ！」ドツ

ドゴオ！

天照「げふう！」ヒュン

ドサツ！

天照を右ストレートで吹つ飛ばした。…いや待て！？

幻斗「何してんだ!?」

月夜見「悪い、姉上の態度に少々イラついたのでな…まるで負けた者のような態度  
じやなかつた」

幻斗「それはそつだが…」

天照「……ごめんなさい」

突然天照が謝りだした：俺は黙つた方がいいだろうな。

天照「今まで敗北という経験をしたことなかつたの」

月夜見「…私や素戔鳴との手合せは全勝だつたな」

天照「そうね…でも、この戦いで初めて敗北を味わつた」

月夜見「気分はどうだ? 新鮮か?」

天照「ええ、清々しい気分よ…まるでやりきつたような感じ。でもそれで敗者らしくしないのはダメね」

月夜見「そうだろうな…はあ。こんなシリアルスな話はやめよう。姉上」

天照「…月夜見?」

月夜見「次は一対一で戦おう」

天照「…ふふつ、分かつたわ」

月夜見「じゃあな」クルツ

天照「またね…」

スタスタ

月夜見はそのままこの場を去つた。

幻斗「…お前ら、姉妹仲いいのか?」

悪くはなさそうだが。

天照「さあ? ケンカはほとんどしないし、悪くはないと思うわよ?」

幻斗「そうか…」

なら次会つても戦いの件以外は仲良くするんだろうな。

幻斗「…コレ以上は言うことはない。じゃあな、天照」

天照「ええ、また何処かで…今度は味方として会いましょう」

――――――

――――

――――

――――

――

夢幻大戦から数日後。里が戦後で疲弊したのをどこかで知ったのか、悪い妖怪が次々と襲撃してきた…ま、全員ザコだったのですぐ倒したが。この程度の力で疲弊した俺達を倒せるとでも?

幻斗「呆れたもんだな」

ルーミア「そうね」

俺とルーミアは襲撃されないか注意しながら森を巡回していた。住民達の中で体力が回復しきつてる人も巡回に手を回している。

コオオオオ：

しばらくすると、謎の気配を感じた。まるで誰かに見られているような、そんな感じだ。

幻斗「ルーミア」

ルーミア「ええ…」

ルーミアも気付いているようだ。ふむ、視線は…大体5時の方向だな。  
シャキン

幻斗「出てきやがれ！」ズバツ

「きやつ!?」ドサツ

刀で空間を斬ると、何もない空間から金髪の少女が現れた。：外見はまんま紫だな。  
「…ハッ！氣付かれた!?」

反応遅っ!?

幻斗「あー…誰だお前？んでどうして俺達をストーカーしてたんだ？」

とりあえず名前を聞くか…もう知つてること。

紫「（すとーかー？何それ？）私は八雲紫よ…すとーかーって何なの？」

やつぱり紫か…胡散臭そうな雰囲気が全くないな。

てかストーカーって言葉は里のヤツらに通じる言葉だつたから慣れてたわ。…ん？  
でも天照が『ダウン』という言葉を理解してたような。…まあいつか。

幻斗「どうして俺たちを着けていたんだ?」

紫「興味があつたの、ニンゲンと妖怪が共存する里に」

幻斗「…ほう?」

…ふむ。興味があるんなら別にいいが、この場所は地理的に元々場所を知つてないと  
いけないレベルの地形だぞ? 大和のヤツらは何らかの方法でこの場所を知つたんだろ  
うが、それがない紫がココにたどり着くのはおかしい。

幻斗「誰に聞いた、その話?」

紫「風見幽香」

幻斗「…なら納得だな」

幽香に場所を教えたしな…そういうえばアイツ元気かな? そろそろ会いに行くか。

幻斗「でも、何故興味を持つたんだ? 側から見ると天敵同士が仲良くしている頭おか  
しい集団のハズだぞ「そんなことない!」…ん?」

紫「この里のは立派よ! 私が実現しようとしているニンゲンと妖怪の共存を真っ先に  
実現していく…しかも平和な里。立派でないワケがないわ!」

幻斗「…そうか」

ちよつとイジりすぎたかもな。

幻斗「…なあ、紫」

紫「？」

幻斗「お前はココに住みたいのか？」

紫「…………うん」

幻斗「なら来いよ。夢幻の里は敵対しない限り何でも受け入れるさ」「

こうして、紫はしばらく里に住むこととなつた。

⋮将来できるであろう、幻想郷を創る為の教材として。

# 妖狐と花が大好きな妖怪

s i d e 三雲幻斗

紫が里に暮らすことになり、数百年が経つ。そんなある日のこと。

「幻斗様、私を貴方に仕えさせて下さいつつ！」ザツ

今日も俺は五尾の狐の少女に部下入りを懇願されている…確かに数年前からずつと言  
われてるな。

一回想ー

俺は里付近の山を巡回していた。

幻斗「…ん？」

少し先から微かな気配を感じる。こんな気配がするのは…意識が朦朧としているヤ  
ツだ！

ダツ

急いで気配がする方に駆け寄ると、そこには死にかけている妖狐がいた。

「う、ううつ…」

幻斗「お前、大丈夫か!?」スツ

ギュン…

とりあえず靈力を与えて回復させる。

「ツ…誰…？」

幻斗「その前にだ、お前はどうしてこんな所で…」

「いたぞ！」

道の先から男が数人現れた。外見から察するに退魔師か何かだろう。  
「そこのお前、妖怪から離れるんだ」

「や、助けて…」

妖狐は男を見るや否や恐怖で震えていた。…この妖狐の気配からして恐らく悪事は  
働いていないのだろう。

幻斗「…お前らは何故コイツを追つている?」

「あ? 妖怪だからに決まってるだろ」

「妖怪は悪、常識だろ?」

「ほら、さつさとどけ。コイツを殺す」

……はあ。やつぱり偏見は聞いててムカつくな。

幻斗「断る」ザツ

倒れている妖狐の前に立ち、退魔師どもを向く。

幻斗「どうせお前らは『罪もない』妖怪を殺そうとしてるんだろうが、そうはさせん」

「罪もないだあ？ 妖怪の時点で罪なんだよ！」

「コイツと妖怪はグルだ、まとめてやつちまえ！」

：結局こうなるのか。

幻斗「結界」ピキッ

キン！

退魔師のお祓い棒が結界によつて弾かれる。

「何、結界だと!?」

「コイツ、ただものじゃねえ……！」

結界が張れるだけでただものじやない？んなモン里では常識だぞ？

幻斗「お前ら、今すぐ立ち去れ。罪もない妖怪を傷つけるヤツらは……俺が許さん」ギ

口ツ

「ツ……覚えてろよ！」 クルツ

ダツ：

退魔師どもは恐れをなして逃げていった。俺が結界を張つて、ちょっと睨んだだけで

逃げるなんてな……情けないヤツらだな。

「たす、かつた……」

妖狐は安心したのかその場で意識を失つた。傷は俺が治したのでなくなつてゐる。  
：里に連れて帰るか。

幻斗「よつ：と」

妖狐をオンブして里に連れ帰り、里の空き家の布団に寝かせた所で彼女は目を覚ました。

「ここは…」

幻斗「目を覚ましたか？」

「…あつ、命の恩人様！」

幻斗「三雲幻斗だ」

「幻斗様、ありがとうございます！何とお礼したら…」

おおう、様付けか：新鮮だな。

幻斗「いいってことよ。お前、名前は？」

「……」

「…ん？」

幻斗「まさか無いのか？」

「はい…」

幻斗「ふむ…」

妖狐は尻尾が三本生えていて、朱色の服を着ている。

朱「読みはあけ、だから…」

幻斗「…朱美」

「えつ？」

幻斗「お前はこれから朱美と名乗れ」

朱美「朱美：はい、幻斗様！」

ガラガラ

扉が開き、天也が入ってきた。

天也「幻斗さん、食べ物を持つて来ました：おお、目を覚ましたか」

幻斗「まあな。コイツは朱美、今名付けた」

朱美「朱美です」

天也「えつ、名無しだつたんですか？尻尾が三本生えてる狐つてだいぶ生きているハ

ズですが…」

：確かにそうだな。

幻斗「朱美、どうして名無しだつたんだ？」

朱美「私には自分の名前を付けるという才能がなくて…」

ああ、なるほどね。シンプル。

一回想終了

あれからというもの、俺は朱美が住んでる家を通りかかる度に：いや、なんなら俺が家を出る度に部下入りを懇願してきている。恩人に恩を返したいのは分かるが、流石に俺は部下なんて要らんしな：

だが、朱美が俺の部下になるべくして相当努力してるのは分かる。なんせ数年で三尾から五尾になってるからな。

「なあ朱美、いい加減に諦めたらどうだ？ 幻斗も流石に困ってるぞ？」  
ほら、言われてるぞ？

朱美「嫌よ、私は命の恩人である幻斗様の部下になるの！」

⋮ちよつと恥ずかしいからそれは言わないでくれ。

幻斗「⋮なあ朱美、お前は恩を返したいんだろう？ 別の形で返せないのか？」

朱美「私は部下として恩を返したいのです！」ふんすつ

ふむ⋮つまり恩を返したい思いと単純に俺の部下になりたいという願望が混ざつてる状態か。⋮断つてもいずれ俺は折れるだろうしな。

幻斗「分かったよ、俺の部下にしてやる」

朱美「⋮！ ホントですか「ただし！」⋮？」

幻斗「まずは九尾になることだ。九尾になつたら、お前は俺の部下となり三雲朱美と

名乗ることとなるだろう」

…さて、どうする？

朱美「九尾：承知しました、早速九尾になるべく修行してきます！時空の歪みにゴー！」

ダツ  
ヒュウウン！

おおう、速いな…

「幻斗さん、大変なヤツを部下にしますね」

幻斗「ま、なんとかなるだろ。実際アイツは有能だしな」

―――

―――

―――

―――

s i d e 八雲紫

紫「……」スツ

ピキイン！

私は能力を活用して協力な結界を張る練習をしていた。

ルーミア「じや、早速試すよ：ナイトバード！」ゴオツ  
⋮ドシユウ！

ルーミアの攻撃は結界によつて防がれた。⋮つまり、成功だ。

紫「⋮ふう」スツ

ルーミア「成功ね。でも連續で使用すると疲れるようだから、自身の妖力量を増やすべきなんじやない？」

紫「次は妖力量ね、分かつたわ」

ルーミア達里の妖怪から助言を貰えたおかげで元々大妖怪級の私の力はどんどん上昇していった。いずれは大妖怪を超える領域に達するだろう。

⋮ザツ

2人『?』

「ふーん⋮ココが夢幻の里ね。綺麗な花が咲いているじやない」

短髪の緑髪、赤い目と傘⋮そして『成長期のニンゲン』くらいの身長⋮花が大好きな妖怪、風見幽香がそこにいた。

幽香「あら、紫に闇の大妖怪じやない。この里に住み始めたというのは本当だったのね」

紫「ええまあ⋮どうしてこんな所に？」

幽香「…ちょっと遊びに、ね」

ルーミア「遊び？…ああ、幻斗に用があるのね」

幽香「察しが良くて助かるわ。所で：貴女もやるかしら？」じつ

幽香は新しい遊び道具を見つけたような目でルーミアを見つめる。  
ルーミア「いいけど…怪我するよ？」

幽香「へえ？」

そして2人は遊び…という名の手合せを始めた。

：幻斗を呼びに行くわ。

# 狐火の炎天掌

s i d e 三雲幻斗

『レベル410 次のレベルまであと3892万1947』

朱美「せいっ！」バツ

ドゴオ！

幻斗「へつ、いい攻撃じやねえか」

朱美「まだまだ！」ドツ

俺が朱美に九尾になれと言った日から数年後、俺は時空の歪みで朱美を鍛えていた。朱美は今では八尾になつており、歪みの中で加速した時間を数えるとそろそろ千年だろう。九尾になるには最低千年必要だからな。

幻斗「おつと」サツ

：ギュン！

幻斗「俺のターンだ。三雲斬り！」シャツ

朱美「結界！」ピキツ

キン！

ほう、瞬発的に結界を張るとは…相當成長したようだな。

幻斗「だが詰めが甘い！とうつ！」ズドツ  
パリイン！

朱美「ツ…！（やつぱり刺突技には弱い！）」サツ

一数分後

朱美「ハア、ハア…そろそろバテそうなので、必殺技を出してやります…！」ボツ  
朱美は狐火を出し、手に集中させる。そして左足で地面を蹴る。

幻斗「…速！」

朱美「炎天掌！」ドツ

ズガアン！

幻斗「かはつ…！」

火を纏つた掌底は俺の腹に命中し、俺は少し後ずさりした。その技名と威力…満身創痍の状態でこれ程とはな。

朱美「へへっ、当たった…あつ…」ドサツ

朱美は疲れきったのかその場に崩れ落ちた。俺はすぐ彼女に駆け寄り、話しかける。

幻斗「凄えな朱美、いつの間にそんな技覚えたんだ？」

朱美「つい、最近です…」

幻斗「お前が九尾になつた時、この技がお前の十八番になるかもな？」

――――――

――――

――――

――――

しばらく休んで体力を回復した後、俺と朱美は村の茶店で団子を食べていた：最近団子の餅をおいなりさんで包み込んだ稻荷団子なるものが流行つてているようで、朱美はそれを美味しそうに食べている。：俺？きなこだが？

朱美「はむつ…ん♪」

（わあ、癒される…）

店内の人たちは朱美の姿に癒されているようだ。

ガラガラツ

幻斗「…ん？」

店に3人入つてきた。ルーミアと、紫と…えつ？

幻斗「幽香りん？」

幽香「幽香りんじやない！幽香よ！」

花が大好きな妖怪こと、風見幽香もいた。コイツの身長、前世で見た身長より低いんだよな…例えるなら前世で見たヤツが大人として、今の幽香は中学生ぐらいだ。

朱美「…幻斗様、この人は？」

幻斗「花が大好きな妖怪って知つてるか？」

朱美「あ、この人なんですね」

…とか、それよりも。

幻斗「3人とも、出入り口から一旦離れろ」

他の客に迷惑だろうが。

3人『あ』

…数秒後…

近くの席に座り、3人はそれぞれ団子を頬んだ。

幻斗「なんでルーミアと幽香はボロボロなんだ？」

2人『手合せをしたの』

…手合せしたのか。

幻斗「それで、誰が勝つんだ？」

ルーミア「幽香。…私も例の剣で善戦はできただけどね」

幽香「…あの剣は反則よ。何よ嵐を起こす剣って」

あー…うん、アレはチートだよな。俺もアレをくらつて負けそうになつた。（解説は後書きで）

「おまちどう〜」コトン

幽香「……いい味ね」パクツ

それは良かつたな…さて。

幻斗「それよりも、どうして幽香は里にわざわざ徒步で来たんだ？この前（数十年前）にお前用の転送装置を置いたばつかだろ？」

幽香「…道中の花を眺めるのも一興と思わない？」

ああ、そういう妖怪だつたなお前。

幻斗「んで、要件は？俺と手合せか？」

幽香「話が速くて助かるわ。貴方に負けてから私は鍛え直したのよ」

幻斗「ほう？」

まあ確かに身長は伸びたな。：関係ないか。

幽香「だから後で：勝負をしましよう？」じつ

幻斗「…分かつた。だがその前に」

コオオオオ：

紫「…

ルーミア 「…」

朱美 「…」

ゴクリ…

幽香 「…」

幻斗 「団子を楽しもうではないか」 どーん

幽香 「同感ね」

3人 『真面目な雰囲気ぶち壊しか！』  
いやいや、んなモンどーでもいいだろ。

# 幻斗V.S 幽香①

s i d e 三雲幻斗

団子、美味しかったな…と思いながら、俺たちは開けた場所に出た。

幻斗「ココでやろう」

幽香「ええ…」スツ

幽香は俺から少し距離を取り、傘を構える。その傘のせいで傘の妖怪って勘違いされ  
そうだな…

…ビュン！

大妖精「審判は私がするよ。勝利条件は相手の気絶か降参だからね？」

いつの間にか飛んできていた大妖精がそう言つた。…ホントいつも来たん？

大妖精「勝負…」スツ

コオオオオ…

2人『……』

大妖精「…始め！」

…ドツ！

同時に地面を蹴った。

幻斗「三雲斬り！」ズバッ

幽香「ツ！」サツ

キン！

刀と傘がぶつかり合うが、俺が押している。

幻斗「せいっ！」ガキイ

そのまま押し切る。そして幽香の足を狙つて…

幽香「（足を狙うつもりね）フンッ！」ヒュン

俺の狙いに気付いたのか、幽香は体勢を崩した状態で回し蹴りを放ってきた。

幻斗「うおつと…！」ギュン

デカいのを1発放つか！

幻斗「ブルーインパクト」「マスタースパーク」…むつ!?

幽香「ハアッ！」ギュン

ドガアアン！

幻斗「ぐふおつ…」ズドッ

俺が技を放つより先に、幽香は光線を至近距離で放つてきた。痛え…野郎、こつち  
も初見殺しをしてやるよ！

幻斗「風斬！」シャツ

刀を構え、その場で斬撃を放つ…その斬撃は風の刃として幽香に襲いかかる。

幽香「！？グツ！」ズバッ

幻斗「飛斬撃だ、驚いたか？」

幽香「ええ、驚いたわ…次は避ける」スツ

ドツ！

幽香「くらいなさい！」ヒュン

そう言つて幽香はこちらにストレートを放つ。

幻斗「（いやいや、素直に当たるかよ？）オラア！」ドゴオ！

パンチにはパンチで対抗してやるよ！

バチッ…！

拳と拳がぶつかり、衝撃が走る。互いの攻撃の威力がハンパないようだ。

|||||

朱美「凄い試合だね……！」わくわく

紫「ええ……どちらからも気迫を感じるわ」

ルーミア「むう、私もアレぐらいしてたよね？」

紫「ほんと劍を振り回してるだけじゃない」

ルーミア「…………」

※一応ルーミアは劍無しでも幽香と同格です。劍で遊んで油断してたから負けました。

大妖精「あはは……」

|||||

|||||

|||

|||

||

：バゴツ！

拳がぶつかり合う衝撃により小さな爆発が発生し、俺達は後方に飛んだ。

幻斗「……強くなつたなお前」

幽香「貴方こそ、ね」

そろそろ例の技を出すか。

パチン！

俺が指を鳴らすと…大きなスッポンの頭蓋骨が現れた。  
そして…

幽香「……？」

幻斗「ガスター・ブ拉斯ター」

極太光線を放つた。

：は？と思つたその方、何も言い間違えてないぞ。

幽香「ツ！」サツ

あつ、避けられた。：まあいい、いくらでも撃てるからな。

幻斗「ブラスター回転！」バツ

ズドドドドツ！

ほらほら逃げろ逃げろ！（めつちや楽しんでる）

幽香「何よコレ！」ダツ

幻斗「新技だ：お前のマスタースパークと同じ原理だ」

ただし、発動時間が短い分連発できるが。

幽香「…今の技、下手したら一方的に相手を蹂躪できるわね」

幻斗「だな…よつ、と」ガタツ  
ガスター・ブランスターを出し、その上に乗る。

幽香「（ソレ、乗ることもできるのね）…マスタースパーク」ギュン  
ドガアアン！

幻斗「発射！」ドツ  
：ズドオン！

ブランスターから飛び上がり、光線を発射することでマスタースパークを相殺する。そ  
して…

幻斗「風斬・連発！」シャツ

空中から風の刃を数発放つた。

幽香「ツ…」スツ

ピキイン！

幽香は冷静に傘でガードした：その傘、硬いな。だがそのせいで前が見えてないぞ！

幻斗「三雲斬り！」ドツ

ズバツ！

幽香「ぐうつ…！」

傘で前が見えないせいで俺の攻撃に気付くのが遅れたのか、幽香はダメージを受けた

：いや、まさかわざとか！？

幽香「：花鳥風月！」ビュン

ズドツ…！

幻斗「ガハツ…！」

：気付くのが遅かつたのは俺の方で、幽香は素早い動きで俺を攻撃した。何だよ今の技  
：原作で聞いたことないぞ？

（メタいぞ）

# 幻斗 v s 幽香②

s i d e 三雲幻斗

幽香が開発したものであろう技をくらつた俺は、そのスピードに驚いていた。  
幻斗「あのスピードは異常だ：目にギリギリ見えたが、恐らく瞬間に音速を超えて  
るだろうな）その技、いつ覚えたんだ？」

幽香「貴方に負けてから編み出したのよ。どう、驚いた？」ニヤリ

幻斗「ああ：いい技だ」ニヤツ

だが、おかげで俺はもう油断しないぞ？

幻斗「どうつ！」

俺は空中に飛び上がり、足先に靈力を溜める。

幻斗「スカイドロップ！」ヒュン

そして幽香に向かつて蹴りを放つ。

幽香「…！」スツ

キイン！

俺の蹴りは幽香の傘で防がれた…だが本命は違うぜ？

幻斗「風突！」ヒュン

傘を蹴った反動で宙返りをし、その勢いで幽香の脳天にかかと落としをぶちかました。

⋮ドゴオ！

幽香「ツツ！」ヨロツ

頭に強烈な一撃を入れられた幽香は脳が揺らされたのか少し足元がふらついた⋮隙あり！

幻斗「ブルーインパクト！」バツ

ズガアン！

幽香「かはつ⋯⋯！」ヒュン

⋮ドゴオ！

俺にコンボを決められた幽香は吹つ飛ばされ近くの岩盤に激突する⋯⋯まるでブロリードがベジータにやつたようなクレーターができた。少し小さいけど。

幽香「ツ、痛いわね⋯⋯！」ヨロツ

幻斗「どうだ？」

幽香「貴方のおかげで頭がクラクラするわ⋯⋯」

幻斗「安心しろ、後で治す」

俺が倒してからな。

幽香「…もう本気でいくわよ」ポイツ  
ドサツ…

幽香は傘を投げ捨て、構える。

幻斗「…へつ、そうか」スツ

…ドツ！

幽香「…！」ヒュン

ドゴオ！

幻斗「フンツ！」バツ

サツ、シユバツ！

お互い本気を出し、喋る間も無く拳を振るう。

।

।

।

।

।

।

ルーミア「速い…！」

紫「目が追いつかないわ…」

朱美「コレが、幻斗様の本気…！」キラキラ

大妖精（あつ、朱美ちゃんは見えてるんだ）  
※大妖精も何故か見えてる。

――――――

――――

――――

――――

幻斗「どうつ！」

幽香「ハツ！」

バゴオ！

2人『せいっつ！』ヒュン

ズガアン！

パンチ、キックをひたすら繰り返す…しかし何故か楽しい。この高揚感はいいな。

幽香「フンッ！」

幻斗「でりやつ！」

：バゴツ！

拳がぶつかり合う度に衝撃波が発生するほどの力で戦ってる俺達を側から見ると、た  
だの手合せには見えてないだろうな。

ザツ

2人『ハア、ハア…』

俺達は長時間の格闘で息が上がっていた。

幻斗「そろそろ…終わりにしないか？」スツ

幽香「ええ…いいわよ」スツ

…ギュン！

幻斗「うおおおおおおっ！」

幽香「ハアアアアアアツ！」

お互い残ったエネルギーを全部つぎ込んだパンチをお見舞いする。

ズドツツツ…！

拳が当たつたのは…

幽香「グフツ…」

幽香だつた。

…バタン

俺の拳をくらつた幽香は、そのまま力なく倒れた。

幽香「⋮フフツ、私の負けよ」

大妖精「むつ、降参！よつて勝者、幻斗くん！」

手合せは俺の勝ちに終わった。

# えつ、もうそんな時代!?

s i d e 三雲幻斗

手合わせが終わり、俺は幽香を家に招いた。ルーミア達は朱美や紫の強化に戻つたらしい。

幻斗「……で、お前が来た理由は手合わせだけなのか?」

幽香「手合わせが一番の目的よ……でも、実はココに移住しようか考えてるの……え?」

幻斗「お前、ココに住む予定なのか?」

幽香「ええ。貴方より弱くても戦いがいのある相手はそこそこのうだし、退屈しないと思うわ」

幻斗「ほーん……」

幽香がココに移住したら、パワー・バランスが崩れ……んな事最初から考えてないな。別に悪影響は出ないだろうな……むしろ幽香が言う『戦いがいのある相手』が増え、夢幻の里全体のパワーアップにつながるかもだから、メリットしかないだろう。

幻斗「ま、来る時は言つてくれ。歓迎するから」

幽香「そう…ありがと」スツ  
ズズツ…コトン

幽香「ところで…貴方は里の外の動向をどれくらい知つてゐるのかしら?」

幻斗「動向? そうだな…大和の国の神々が天界に移住したりしたのは知つてゐるが」  
その時神奈子が守矢神社に引っ越して、そこで諏訪子に会つたな。

幽香「それつていつの話よ…私が言つてるのはココ数年の話」

幻斗「…………isman、全く分からん」

そもそもいつぐらいの時代なんだ? 卑弥呼辺りはもう過ぎてるだろうし。

幽香「ココ数年で、都…大和で聖徳太子つてヤツが色々とやつてるらしいわよ?」  
…………ん?

幻斗「今、聖徳太子つて言つたか?」

幽香「ええ」

……おう、マジか。つまり脇神子こと豊聰耳神子に会えるじゃん。時代は飛鳥時代  
か。

幻斗「なるほどな…で、その色々つてなんだ?」

幽香「貴族に位を与えたり、仏教を広めたりね」  
教科書通りの活躍のようだ…よし。

幻斗「ソイツに会いにいくか」ガタン

幽香「は?」ポカーン

俺がいきなり会いに行くと言ったからか、幽香はぽかんとした表情だった：そりやそ  
うだな。

幻斗「貴重な情報をありがとな、幽香」

幽香「…ちょっと待ちなさい、私が言つた瞬間に何よいきなり会うつて」

幻斗「前に俺の前世云々について話したじやねーか。聖徳太子つて結構有名人なんだ

よ」

俺は前世について今までに月夜見、ルーミア、大妖精、天也、朱美、紫、幽香に話し  
ている。

幽香「…そう、それなら少し納得できるわね」

幻斗「じゃあな幽香、里に来た時はよろしくな」

幽香「ええ、また会いましょう」

ガチャッ

| |

朱美「幻斗様、都つて何処にあるんですか？」

里をしばらく出るとルーミア達に言つたら、朱美がついてくることになつた。

幻斗「そうだな：元々大和の国があつた場所だから道は分かる。強いて言うなら、それが程遠くないつて所か？」

朱美「なるほど…」

スタスタ

朱美「それでも、幻斗様の前世つて凄いですよね。今の時代から1500年後の世界つて、想像ができません」

幻斗「だろうな…だが、ソレが事実だ」

俺が転生してこの世界に来れたのは奇跡だとしか言いようがない。本来なら某病気で死んで、それで終わりだ。

幻斗「朱美、お前がもし前世の記憶を持つて転生したら、どうする？」

朱美「うーん：分かりませんね。もし今と同じように朱美として生まれ変わったなら、のんびり生きるぐらいですかね？」

幻斗「そうか…」

まあ、転生なんて滅多にないことだし、想像もつかないのは当たり前か。  
…こんな感じの雑談をしながら、俺達は都へと移動したのだつた。

# 聖徳太子（♀）

s i d e 三雲幻斗

夢幻の里を出て数日後、俺と朱美は都にたどり着いた。

幻斗「おお…」

教科書に載るような場所を生で見ることができるとはな…なんというか、感慨深いな。

朱美「都つて…」

幻斗「？」

朱美「正直文明進んでなさそうですね」どーん

…フア!?

幻斗「いやいやいやいや、コレが普通だからな?月の都とか夢幻の里の文明が進んで…いや、進みすぎてるだけだからな?」

つつても、夢幻の里は大体江戸時代だぞ?それ程差は…あるか。

幻斗「…とにかく、文明云々はあまりツツコまないでやれ。それと変な言動は慎めよ

?怪しまれたらヤバいから」

朱美「了解です」

スタスター：

飛鳥時代の道並みを歩く。俺たちの服装は周りに合わせてるので怪しまれないが、偶に視線を感じる。

「……」

幻斗「（ずっと見てるヤツがいるな…）朱美、路地裏に出るぞ」

朱美「はい」

クルツ

路地裏に出て、後ろを振り向く。…しかし誰もいない。隠れているようだ。

スタスター

幻斗「（もう少し進んで……今だ！）誰だ！」クルツ

「？」ビクツ

振り向くと、フードのようなものをつけた人物が驚いていた…顔は見えないが。

幻斗「えつと…お前、誰だ？ そして何故付けていたんだ？」

「……」スツ

フードの人は懐から何らかの玉を取り出した。…おいおい待て待て、ソレ絶対煙玉だよな？ 逃げるつもりだな？

幻斗「朱美」

朱美「はい……と」スツ

「？」ギュッ

朱美は（常人には）目にも止まらぬスピードで煙玉をフードの人から奪い取った。ついでに縄で腕と脚を縛つている。

朱美「幻斗様、さつき縛った感覚からして……この人、女ですよ?」

幻斗「ほーん……んで、結局誰なんだお前?」

「……はあ、流石夢幻の里から来た者ですね」スツ

……いいつ!?

神子「私は豊聰耳神子……人々からは聖徳太子と呼ばれています」

まさか会おうとしてた本人だったとはな……うん、なんで俺は気付かなかつたんだろ。  
……つて

幻斗「お前、夢幻の里を知つてるのか?」

神子「ええまあ……人と妖怪が共存する里、と。貴方がたの話を少し盗み聞く……聞かせてもらいました。貴方か夢幻の里の主……三雲幻斗さんですね?」  
……言い換えたようだが、対して変わつてないぞ?

幻斗「ああそうだ。俺が何故ココに来たか……分かるか?」

神子「私に会いに来た…と聞きました」

幻斗「正解だ…ま、正確には「私に向かつて11人で話しかけるつもり、と？…おつ、お前の能力はそこまで読み取れるのか」

神子の能力は10人の声を聞き分ける事ができるが、さらにその声の先にある思惑も読み取れるらしい：前世知識だ。

神子「中々変な考え方をお持ちのようで」

幻斗「夢幻の里の主をストーカーするお前も大概変なヤツだと思うがな？」

神子「は、はあ…（す、すとーかー？）」

俺と朱美はあの後神子の家に招待された。『聖』徳『太』子だけに…寒つ。

2人『お帰りなさいませ、太子様！』ザツ

緑髪と銀髪の少女が出てきた。原作より見た目が若干幼いが…屠自古と布都だな。

神子「おかえり屠自古、布都。お客様を連れてきたんだ」

2人『こんにちは、失礼します』ペコッ

屠自古「あ、どうぞお上がり下さい」

俺と朱美が挨拶をすると、屠自古は上がるのを催促するが：布都の目は朱美に向いていた。

布都「…むつ!?」こ、こやつは妖怪ではないか！」

朱美「うん」

布都「なぬう!?た、太子様、何故妖怪をこの屋敷に!?」

太子「この2人は夢幻の里出身だ」

布都「夢幻の里!?人と妖怪が共存するなどという愚行を行うあの!?」

：おい、コイツさらっと失礼な事を言つてるな。

太子「私はそう思わない…人にも善悪があるように、妖怪にも善悪がある。そうで  
しょう、夢幻の里の主?」

布都「え」

幻斗「ああ…んで、お前」じつ

俺は布都をじつと見る。

幻斗「なあにが愚行だつてえ?」ジロッ

少しイラつとしたので某火の鳥のように布都を睨みつける。布都の防御が下がった

！（ポケモン風）

布都「……す」

幻斗「す？」

布都「スミマセンでしたあ！太子様が肯定しているのに、我はなんてことを！」ザツ  
布都は立派な土下座をかました。：てか、それって謝つてなくないか!?まあ素直だか  
ら許すが。

幻斗「あー…顔を上げてくれ。お前はいい妖怪を見たことがなかつたのかもな。これ  
を機にいい妖怪も知るといい」

神子「それは名案ですね…布都。返事は？」

布都「はいっ！」ビシツ

…うん、真面目だなあ。

布都「ところで、お主の名前は…？」

幻斗「三雲幻斗だ」

朱美「私は朱美、八尾の狐よ」

布都「うむ、分かつた。よろしく頼む！」

幻斗「おう」

そして、俺たちは居間へ案内された。

# 不老不死なんかねーよ（理論上）

s i d e 三雲幻斗

神子としばらく話したが、彼女は仏教を日本に広める身でありながら道教に入信しているようで、仙人になるべく書物を読んでいるらしい。

神子「貴方はニンゲンでありながら、5万年以上生きていているとおっしゃりましたね？」

幻斗「ああ」

神子「不老不死なのですか？」

幻斗「…不老ではあるが、不死かは分からん。今は言えないがとある事情で俺は先天的に老けない体質になってる」

転生したとか言つても信じてくれないだろうしな。

神子「先天的ですか…なら、その人生の中で仙人に会つたことはありますか？」

幻斗「うーん……あるが、今まで会つたヤツらは全員天界に移住してるな。呼んでやろうか？」

ちなみに、その仙人は天也の父親だ。名前は…基山天助だな。

神子「て、天界!? 実在したんですね…」

幻斗「ああ。後魔界や地獄も実在するぞ」

神子「なんと…」

本編には出でないが（メタイ）俺は魔界や地獄出身のヤツに会つたことがある。

幻斗「…なあ、道教の終着点は不老不死なんだろ？」

神子「はい。仙人となり、天人になることで寿命という概念を超越するのです」

幻斗「なるほどな……1ついいか？」

神子「？」

幻斗「俺は…不老不死なんて存在しないと思う」

神子「…え？」

幻斗「確かに何億年も生きる体を持つことは可能かもしれない…だが、本当に死ぬことは不可能なのか？体が完全に消し飛ばされたらどうなる？」

神子「確かに不老不死はタマシイが主軸となるので、タマシイがあれば再生し……あはっ

神子は何かに気付いたようにはつとした表情になる。

幻斗「…な？タマシイが割られれば終わりだろ？」

神子「そう、ですね…」しゅん

：不老不死に到達できないと知つて落ち込んでしまつたか。

幻斗「まあまあ、そう落ち込むな。ぶつちやけ不老不死ってのは苦しいモンだと思うぞ。友達が次々と死んでいく中で、自分だけ永遠に生きる…孤独をずっと味わうことになるんだ」

神子「……「だが」：？」

幻斗「寿命を長くするぐらいなら、俺はいいと思う……神子、お前が仙人になる目的つて何だ？」

神子「不老不死と、自然宇宙の力を得ることです……そういえば、幻斗さんは自然宇宙の力を得た人に会つたことはありますか？」

幻斗「自然なら結構ある：属性操るヤツらとかな。ただ：宇宙に関しては会つたことがない。んなモンこの世界の創造神ぐらいしかできないだろ」

月夜見と天照の母親、イザナミがこの世界：つまり宇宙の創造神だと月夜見から聞いたが、その時はかなり驚いた。創ったの地球じやなくて宇宙なのかよ！？と。

幻斗「この時代の文明じゃまだ分からぬんだろうが：宇宙は広い。そりやもう途方もなくな。そんな宇宙の力を得るとなると：俺でも到底無理だ」

神子「幻斗さんでもですか：（この時代の文明つて：つまり幻斗さんはその先の文明を…？）」

幻斗「…んで、それでも仙人を目指すつもりか？」

神子「…………はい」

：ほう？

神子「不老不死になつたり、自然宇宙の力を得ることはなくとも…私は『高み』を目指すべく仙人を目指します！」

幻斗「高みか…ん、いい目標だな。頑張れよ」

神子「はい！」

その後も俺は神子と色々話した。

# 仙人？滝行しろ

s i d e 三雲幻斗

仙人になる修行をするべく、神子たち3人は……何故か俺に鍛えられることになつた。

幻斗「…いやなんで？」

神子「書物に書いてあつたんですが、どうやらまずは身体能力をどうにかしなければならないようです」

ほーん…ん?

幻斗「あれ？お前戸解仙になりたいんじやなかつたのか？」

原作の神子は戸解仙になりたかつたハズなんだが…

神子「ソレは最終手段ですよ」

幻斗「あ、そなんだ…まあいつか。お前らをどう鍛えればいいんだ？」

神子「肉体と精神、両方ですね」

ふむ……仙人修行といえば、思い浮かぶものがあるな。

幻斗「滝行してこい」

神子「…はい?」(。△。)

幻斗「仙人といえど、滝行だろ。滝行舐めんなよ?滝に打たれることで肉体も強くなるし、精神もソレに耐えることで強くなっていく。まさに一石二鳥の修行だぞ?」

実際、俺は滝行をしたことがあるが…アレは普通の人だとかなりしんどい。

神子「そんなに熱く語られても…つて冗談ですよね?バレてますよ?」

幻斗「あ、バレた?」

コイツらにちゃんとした修行をつけるなら…まずはコレを教えるべきだろう。

幻斗「そうだな…まずは体を流れる力…『エネルギー』について教える必要があるな  
3人『えねるぎー…?』

幻斗「エネルギーには4種類あつて、ニンゲン、妖怪、魔族、神でそれぞれ違う種類を使う。ニンゲンは靈力、妖怪は妖力、魔族は魔力、神は神力…俺はニンゲンであり神でもある為靈力と神力を使う」

神子「靈力、ですか…その使い方を教えるんですか?」

幻斗「その通り。靈力は誰でも持つており、身体や精神を鍛えることで増える…よつ」

ポンッ

俺は靈力の玉を手のひらから出す。3人はそれを見て驚いた。

幻斗「…さて、お前らもやってみろ。まずは体で流れる力を感じ取るんだ」

神子 「…………」

幻斗 「…どうした？」

神子 「いや、いきなりそう言われても…」

幻斗 「とりあえず瞑想してみる。自身の体に集中するんだ」

ドサツ

3人はその場で胡坐をかき、瞑想を始めた。

幻斗 「感じるようになつたら言つてくれ」

一数分後――

俺はじつと瞑想している3人を見ていた。かなり集中しているようだ。

……ギュン

幻斗 「お？」

今、靈力を溜めた音がしたぞ？

布都 「む、できたぞ！」

最初に靈力を感じたのは布都のようだ。

幻斗 「なら次はそれを出してみる。俺がさつき見せた玉のようにな」

布都 「了解だ！」 ドサツ

そして布都は再び胡坐をかき、こんどは手を出して集中を始めた。

その数分後、  
神子と屠自古も靈力を感じれるようになり、玉を出せるように頑張つて  
いた。

# 仙人の侵入者（複数形）

s i d e 三雲幻斗

次の日。3人はなんと靈力の玉を出せるレベルに達していた。  
：速くね？

神子「どうかしました？」

幻斗「習得が速いと思つてな。俺は結構かかつたんだがな：お前らには才能があると思う」

神子「そうですか：（私達に才能、ですか。いずれ幻斗さんの領域に達せそうですね）  
ところで、次は何をすればいいんですか？」

次：「そうだな：」

幻斗「靈力を纏えるようになれ」

屠自古「：纏う？」

布都「どうやつて？」

幻斗「靈力の玉を出しただろ？その玉はカンタンに言えば、靈力を手のひらに集中して作つたモノだ。今度はその靈力で、手を覆うことを想像しながらやつてみろ」

神子「手を覆う…分かりました」

ドサツ

『…修行シーンはコレだけでいいよな（b y作者）』

おい、メタイぞ。

――――――

――――――

――――――

――――――

――――

2週間後。

靈力の基礎は基本的に全部教えた。今では…：

神子「ハツ！」ドツ

幻斗「…！」サツ

靈力込みの手合わせもできるようになつていた。

身体能力に関してはあまり上がつてないハズだが：恐らく自分で鍛えたのだろう。

布都「とりやー！」バツ

朱美「よつ」サツ

布都「避けるなー！」むきーつ

屠自古「いや、普通は避けるだろう」

布都と屠自古は朱美が相手している。

：前回と前々回はなんで朱美がいなかつたのかつて？（メタイ）

別の部屋でゴロゴロしてただけだ。

しばらく神子の攻撃を避けていると、やがて彼女の息が上がりはじめた。

ドサツ

神子「ハア、ハア…降参です」

幻斗「ん…また強くなつてるぞ」

神子「そう、ですか…？」

幻斗「ぶつちやけ基礎は全部教えたしな…後はお前が仙人としての修行に励むとい

い

神子「…はい！」

一数時間後

その夜。

幻斗「…ん？」ムクツ

朱美「…」ハツ

客室の布団で目を覚ます。隣にいる朱美も目を覚ましていた。  
何故なら…

幻斗「…力を持つヤツの気配を感じる」

それを感知して俺達は目を覚ました。

方向は……！

幻斗「神子の部屋辺りだ。行くぞ！」ダツ

朱美「はい！」ダツ

ガタン

神子の部屋…の近くの扉を開いた先には…

「…おや？ 気付かれましたか」

「…げつ！」

「は、速く逃げよう！」

青髪、黒髪、桃髪の女性が俺達の登場に驚いていた…つて

幻斗（青娥、芳香、華扇じやねーか！）

しかも芳香は生きてるようだし、華扇は腕が包帯に巻かれている。

…3人の背後の壁に穴が開いていることについては、敢えて触れないでおこう。

「見つかったようですが、ごきげんよう」スツ

青娥（ほぼ確定）が壁抜けのかんざしを出し、逃げようとするが…もちろんそうはさせない。

幻斗「朱美、かんざしを奪え。俺は3人を縛る」

朱美「了解！」

ドツ

「…え？」パシツ

朱美「はいゲット」

ギュウウウ

幻斗「ふい！」

「いつの間に!?」

「ぬぬぬつ…離すのじや！我らは仙人見習いだぞ！」

幻斗「侵入者を逃がすワケねーだろ。てか、仙人見習いなら普通に訪問しやがれ」

：あ、でも神子は名目上仏教の信者だから無理か。

とりあえずコイツらは…

幻斗「お前らは少なくとも朝まで縛つておく」

「な、なんですって!?」

華扇（暫定）が驚いてるが…敬語じやない華扇つて珍しいな。鬼がいる山に行つた時

も敬語だつたのに。

（幻斗は華扇に会つたことがある。しかし辺りが暗いので華扇は幻斗に気付いてない）  
⋮朝までココで待つか。

尋問は…ほぼしない

s i d e 三雲幻斗

朝までヒマだしな…そうだ。

幻斗「…おい、華扇」

「えつ、どうして私の名前を…って」ハツ

辺りが明るくなってきたので、気付いたようだ。

幻斗「俺だ、三雲幻斗だ」

華扇「げ、幻斗さん…お久しぶりです」

2人『知り合い?』

華扇「ええ、結構昔に会ったの」

幻斗「お前はどうやら仙人の道を選んだようだな」

華扇「…まあ、はい」

幻斗「ソレはそうとして…お前ら2人、名を言え」

もう知ってるけど。

青娥「…霍青娥ですわ」

芳香 「宮古芳香じや！」

幻斗 「これから俺の質問に、正直に答えろ。いいな？」

3人『……？』

俺の尋問タイム、スタート☆

幻斗 「まず1つめ。何が目的だ？」

青娥 「…仙人になりたい仏教徒がいると聞いて」

幻斗 「ほーん…2つめだ。どこから聞いた？」じつ

少し威圧を出しながら質問する。

ビクツ

3人が少し身震いする。

芳香 「えっと、その…」

幻斗 「何だ？言えないのか？…それとも『聞いた』のは嘘なのか？」ギロツ

威圧を強める。

幻斗 「なら、お前らの答えを予想してやる…何らかの方法で観察してただろ？」

3人『…！』

こいつらの姿を見るのは今回が初めてだ…だが。

幻斗 「建物の外からこちらを覗く動物は何回か見たことがある。…犯人は華扇、お前

だろ?」

華扇「!?

幻斗「何故知つてるか、だろ? コイツだ」スツ  
俺が出したのは、お札。動物の視界を共有する、某鬼退治漫画で見たことのある代物だ。

幻斗「コイツにお前の妖力が混じつてたからな」

華扇「…つまり、質問の意味はなかつたと?」

幻斗「いや、意味がないワケじやないな。確信を持つために質問しただけだ」

青娥「…それで」

幻斗「?」

青娥「威圧をそんなに出して、私達に何をするおつもりで?」

幻斗「あー…特に何もしないぞ?」

青娥「…え?」ポカーン

幻斗「別にお前らに罰を与えるとはしねえよ。この建物の主は俺じやねえしな。ついでに縄を緩めてやる」スツ

芳香「…あれ? これつて逃げる機会なのでは「おつと、逃げるのはダメだからな?」  
…あつはい」

華扇「…幻斗さん、仙人になりたい仏教徒がこの建物にいるんですよね？」

幻斗「ああ。この建物の主：神子は確かに仙人になりたいと思つてゐる。ただ…表面上は仏教を信じる為政者だからな、大っぴらにできないんだよ。言つてしまえば国民を仏教で操つてるつづーことだ」

国を纏めるのにもつてこいだからな、仏教は。

幻斗「だからな、お前らが来るべきだつたのは深夜じやなくて夕方とか夜になつたばかりの時間帯だ。そうすりや神子と話ができるからな…まあもうお前らは来てしまつてるし、朝まで待つしかない。いいな？」

華扇「はい（そういえば時機が悪かつたですね…もうちよつと早く来ていればよかつた）」

そして夜は更け、朝になつた。

# 隠れた契約

s i d e 三雲幻斗

朝。

俺は朱美に神子を連れてくるよう頼み、拘束した3人と一緒に待っていた。  
タタツ

朱美「連れてきました！」

幻斗「おお、来たか」

神子はすぐ俺の後ろにいる3人に気付いた。

神子「えつと…この3人は？」

幻斗「昨日の深夜に侵入してきたヤツらだ。3人とも仙人で、この建物に仙人になりたいヤツがいると知ってきたそうだ」

神子「…なるほど」

俺の思考を読み取ってくれたようだ。

華扇「ど、どうも…」

幻斗「…んで、コイツらの処遇は？」

神子「そうですね：質問してもよろしいでしようか？」

3人『?』

：アレ？ また尋問タイムスタートか？

(前回含む)

神子「貴女達は仙人なんすね？」

芳香「そうじや」

神子「（言葉から嘘は感じませんね）ならば、私に協力してくれませんか？」

青娥「…協力、ですか？」

ふむ…なるほどな。仙人に修行の仕方を教えてもらった方が効率的と考えたんだな。

(当たり前だろ)

神子「私…とその従者の3人に、仙人となる修行の手ほどきをしていただきたいので  
す」

華扇「…しかし、仙人への道は長いですよ？」

神子「心得ています」

神子から強い意志を感じる。

芳香「…分かった。元々我らは加害者の身、償いに反論はない」

青娥「私も同じですわ」

華扇「私達が貴女達を鍛えます」

神子「…ありがとう」

幻斗（…フツ）

上手く行つたようだな。

こうして、今ここに世間からは隠された契約が成されたのだつた…。

――――――

――――

――――

――――

――

神子、布都、屠自古が華扇達3人に仙人として鍛えられることになつて数日後。  
俺と朱美は……夢幻の里への帰路についていた。

朱美「よかつたんですか、もう帰つて？」

幻斗「まあ、聖徳太子に会つてみたいつて目的だつたしな」

朱美「そういう事じやなくて：神子さん達つて本来あの後封印されるんですね？」

そう、神子たち3人は戸解仙になろうとした所で仏教の僧侶たちに危険視され封印さ  
れる。…しかし、もちろんその対策はしている。

幻斗「安心しろ、『保険』はかけてる」

朱美「保険、ですか？」

幻斗「ああ：俺が緊急ですぐあつちに行ける代物を渡しておいた。それに、本来キヨンシーよになつてたハズの宮古芳香が仙人として生きてんだ、問題ないだろ」

まあ：宮古芳香がいつキヨンシーよになつたかは知らないから一概に大丈夫とは言え  
ないが。

朱美「そうですか…また会えるといいですね」

幻斗「だな」

結構すぐに会うことになりそつだが。

朱美「あつ、そういうば…」

雑談は続く。

# リーフア・ブリーズ

s i d e 三雲幻斗

数日間歩き、俺達はついに夢幻の里に帰還した。

幻斗「ふい～～」

朱美「やつと帰つて来れましたね！」

：ビュウウン！

ルーミア「おかえりなのだ～！」

前方からルーミアが圧倒的スピードで飛んできた。

幻斗「うおつ!?」ドゴッ

ドサツ

流石に俺は突進（？）に対応できず、ルーミアは俺にぶつかつて押し倒した。

逆床ドンかあ～

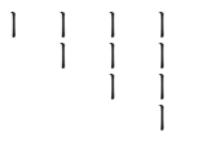
朱美「ちよつ!? 何してるので!?」

ルーミア「あつ、ゴメン」パツ

幻斗「はあ～、お前どうやって俺達に気付いたんだ？」

ルーミア 「気配を感じたの」  
だろうな。

幻斗 「んじや、 家に帰るか」  
スタスタ



数分後、俺は家に着いた。  
着いたんだが…

大妖精「…………」じーつ！

幻斗 「ど、どうしたんだ…？」

ドアを開けて『おかえりなさい！』と言わされてから、ずっとこうだ。

ルーミア 「あー…なんかね」

幻斗 「？」

ルーミア 「ここ数日、大妖精がずっと『私、そろそろ名前が欲しいです』とか言つて

るんだ」

幻斗「名前？」

そういうえばなかつたな。

幻斗「……なあ、大妖精」チラツ

大妖精「……！」わくわく

うおつ……めちゃくちゃワクワクしてやがる。

幻斗「名前が、欲しいのか？」

まあ、朱美に対しても名前を付けてるしソレで羨ましくなつたんだろうな。

幻斗「分かつた、お前に名前を付けてやる」

大妖精「……」じつ

大妖精と言えば……そよ風と共に現れ、生い茂つた葉のように生き生きとしている。

(中二病か)

幻斗「お前の名前は……

リーフア・ブリーズ

……どうだ？」

ルーミア「おお…」

朱美（凄いネーミングセンスですね）

リーファ「リーファ……リーファ！」にこつ  
ギュツ！

幻斗「うおっ」ドサツ

大妖精改めリーファが俺を抱きしめ、押し倒した。  
：また逆床ドンかあ。

リーファ「ありがとう、幻斗くん！」にこにこ

幻斗「どういたしまして」

パツ

リーファは俺から離れ、俺は床から起き上がる。

：ん？

幻斗「リーファ、お前…」

リーファ「？」

幻斗「ちよつと身長が伸びてないか？ざつと…10センチって所だな」

リーファ「えつ？……ホントだ！」

朱美「名前が付いたから、ですかね？」

幻斗「多分そうだな。妖精はそういうものに影響を受けやすいし」というか。

幻斗「どうしていきなり名前なんかを？」

朱美の事が羨ましくなつてたなら、もつと早くに頼んでるハズだ。

リーフア「ソレはね……？」

幻斗「……？」ゴクリ

なんとなく、リーフアの背後から『ゴゴゴ』とジヨジヨのような文字が見える。

リーフア「…そりいえば私も名無しだつたなつて、思ったの！それだけ！」どーん

幻斗「……」ずこつ

それだけかい！

悲報・月夜見、会つて数秒で幽香にケンカを売られる W W

S i d e 三雲幻斗

今日は数年ぶりに月夜見が夢幻の里に来る日だ。俺は村付近で来訪を待っている。

幻斗 「そうだな：いいヤツ？」

朱美 「ええ、なんですかソレ。もつとこう、具体的にお願いします」

!?  
幻斗「うーん……」「リーダーシップのある人、なんてどうだ?」おう、ソレだ…ん

クルツ

聞き覚えのある声がしたので振り返ると…

月夜見「少しうりだな、幻斗よ」

そこにはいつものようなスーツを着た月夜見がいた。

うん、イカしたスーツだな〔

幻斗「ああ、久しぶりだな月夜見」

月夜見「この子は？」

幻斗「俺の部下になる予定の朱美だ」

朱美「八尾の狐の朱美です！」

(何故か敬語)

月夜見「朱美か、よろしく頼む」

朱美「はい！」

幻斗「んじや、ココで話すのもアレだし……ん？」  
ドドドドッ！

前方から誰かが走つてきている。

緑髪で、赤目。傘を持っている…幽香か。

幽香「貴女が月夜見ね？」

月夜見「ああ、そうだが…」

幽香「私は風見幽香、花の妖怪よ…少し手合わせ願えるかしら？」

幻斗「……やつぱりか」

流石幽香、会つて数秒でケンカ売るなんてかなりの戦闘狂だな。まあ…

月夜見「…ほう？いいだろう、戦おうじゃないか」

それを速攻で買う月夜見も大概だが。

幻斗「…はあ。あつちでやつてくれよ？」

あつちとは、俺と幽香が手合させした場所である。



ちなみに、その光景を見ていた天也と紫は

天也「ん？あ、月夜見さんだ」

紫「月夜見：ああ、数年ぶりに来たのね」

天也「……えつ、幽香にケンカ売られてる」

紫「…は？」

天也「しかも買つた！」

紫「はい！」

：という反応をしていた。

| | | |

| | | |

コオオオオ：

月夜見 「…………」スツ

幽香 「…………」ザツ

月夜見は構えを取り、幽香は傘を月夜見に向ける。

幻斗 「んじや、よーい：始め！」

ドツ！

月夜見 「どうつ！」ギュン

幽香 「ツ！？」

ドゴオ！

月夜見が圧倒的スピードで幽香との距離を詰め、ストレートを叩きこんだ。

幻斗（相変わらず速いな：）

幽香（何、今の：見切れなかつ 「驚いているヒマはあるんだな？」…ツ！）ギュン

月夜見 「…おつ」

幽香 「マスター・スパーク！」バツ

ギュオオオ！

幽香は月夜見に向かって極太光線を放つ…しかし。

月夜見「結界」ピキッ

：シユウウウ

結界1枚によつてソレは止められてしまつた。

幽香「な…」

月夜見「今度は私の番だな…ハツ！」ギュン

ドツ！

月夜見「ムーンフォース！」

：ズドオン！

幽香「ガハツ…」ヒュン

ドゴオ！

月夜見のパンチをモロに受けた幽香は、少し吹つ飛んで地面に激突した。

幽香「ちーん

幽香はその場で気絶していた。

幻斗「勝者、月夜見…なあ」

月夜見「何だ？」

幻斗「俺が幽香と戦った時、スポーツの範囲内で本気を出すぐらいだつたんだが？お前本気出しすぎてね？」

月夜見「…そうだな、少し本気を出してしまつた。ま、彼女にとつては初対面の相手にケンカを売つてはいけないといういい教訓になつたんじやないか？」

幻斗「足し蟹」

ソレはいい教訓だな、多分。

# 月夜見は早く来た

s i d e 三雲幻斗

数分前、月夜見は幽香をボコした。

：んで、今は自宅で月夜見とティータイム中だ。

お茶はこの時代でまでないつて？ シャラップ。

月夜見 「月の都特産品の桃で作つたピーチティーだ。美味しいだろう？」  
ズズツ

幻斗 「ん、美味しいな。俺が作つといたチーズケーキとも合う  
いやあ、月の都つてホントに色んな食材があるんだよな。

ちよつくら地上に降りては材料（動物含む）をかつさらつてるらしいが…ソレ、目撃  
されたら神扱いされないか？なんて思つてしまふ……いや月夜見は神だけども。

月夜見 「お前の前世知識つて、こういう時も役立つんだな」

幻斗 「前世知識つつーか、お前がレシピ本渡してきたから作つただけなんだが？」

月夜見 「そうだつたか？…まあいい。朱美も飲むか？」

朱美 「飲みます！」

月夜見 「ちよつと待つててくれ……はい」コトン

朱美はソレを受け取り、一口飲むと、尻尾をぴょこぴょこさせながら喜んだ。

朱美「↓↓♪」

月夜見（フツ、可愛いな……）

幻斗「……そういえば、どうしていきなり来ることにしたんだ？ いつも通りなら来るのは半年後ぐらいのハズだが」

数日前に連絡が来てちよつと驚いたぞ。

月夜見「えつ？ そ、それはだな……」おどおど

……ん？ いきなり焦りだしたぞ？

しかも心なしか顔が少し赤くなっている。

幻斗「熱か？ ……って、そりやないか」

流石に俺は鈍感系主人公のような行動には出ない。

月夜見「じ、実はだな？ お前に会いたくてな……」あたふた

幻斗「俺に会いたい？」

月夜見「半年も待てなかつたから來たんだ……ダメか……？」チラツ

……つ、上目遣いだと……！？

幻斗「お、おう……」

コイツ、まさか俺の事好きなの？勘違いかもしれないから訊かないけど。

月夜見「…」、こんな話はやめだ！朱美、ちょっと来てくれないか？」

朱美「？はい」ひよい

幻斗「？」

月夜見「ここに寝るんだ」ポンポン

月夜見は何故か朱美を膝枕すると…  
スツ

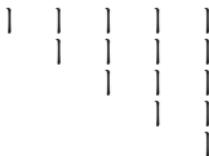
月夜見「ふふつ…」ナデナデ

朱美「はわあ…」

ケモ耳を撫ではじめた。

：月夜見はケモナーなのか？

月夜見はしばらく朱美の頭や尻尾を撫で、俺はソレを眺めるのだった。



幽香「…はっ！」

紫「あら、起きたの？」

幽香「…………月夜見、さん。強かつたわ」

紫「…さん？」

幽香「あの圧倒的強さ、敬意を払うべきだと思つてね」

紫「でも幻斗は？月夜見と同格よ？」

幽香「幻斗は…そのままでいいわね」

紫（扱いの違いが凄いわね！？）

幽香「…あら、傷が治つてるわね。治してくれたの？」

紫「え、ええ…（と言つても、薬品を塗つただけだけど）」

お前はもう九尾になつてゐる

s i d e 三雲幻斗

朱美「そ、そろそろ離してくれませんか…？」

月夜見「ん？ああ、すまないな。撫でさせてありがとう」パツ  
…長かつたな。多分1時間ぐらいずつと撫でてたぞ？  
(ソレをずっと見てたお前も凄いな)

幻斗「…………ん？」

びよこん

幻斗「朱美、お前の尻尾…………9本になつてないか？」

朱美「え？」チラツ

朱美は自分の尻尾をよく見ながら数える。

朱美「1、2、3、4、5、6、7、8…………8本ですよ？」

幻斗「いやいや、1本隠れてるぞ」

月夜見「…ああ、そういうえば撫でてた時9本あつたな」

朱美「ええ…？…………あつ、ホントだ！」

1本の尻尾が8本の中に混じっていた。

…やつとだな。

幻斗「…つまり、お前はもう九尾の狐だな」

月夜見「確かにコレで正式に幻斗の従者なのだろう？」

朱美「…………！」はつ

サツ！

朱美はソレに気付くと、凄い瞬発力で俺のところに来た。

…さて。

幻斗「…朱美。お前を俺の部下に正式に任命する。これからは三雲朱美と名乗れ、い  
いな？」

朱美「はい！」ギュツ

朱美は嬉しそうに俺に抱き着いてきた。リーフアの時もそうだが、名前を貰つたら抱  
き着くのってルールか何かなのか…？

少しして俺から離れると、朱美は宣言した。

朱美「この私：九尾の狐三雲朱美は、主人である三雲幻斗に従順に仕えることを誓い  
ます！」ドン！

…ん、威勢のいい宣言だな。

幻斗「よし、今夜はみんなを呼んで焼肉だ！宴会をするぞ！」

朱美「やつたー！」

※村に焼肉屋がある。

――――――

――――

――――

――

全員『かんぱーい！』

カアンツ！

「よかつたな朱美、やつと幻斗さんの部下になれて」

朱美「うん！これからは幻斗様を色々と世話をするよ……それこそ夜の……」

「いや流石にダメだろ」

…ナイスツツコミだ。

右狼「なんとなく俺達の出番がめつきりなくなつたよな、左虎？」

左虎「だな、右狼」

メタい事言つてるのは右狼（うろう）と左虎（さゝ）だ。

：誰のかつて？仲良しコンビだよ。こいつらは天也を除くと多分村で1番強い2人だ。2人で最強つてヤツだな、多分。

幽香「月夜見さん、私とまた勝負してほしいの」

月夜見「ふむ：時空の歪みで100年程修行してから出直してこい」

幽香「：分かつたわ」ガタツ

ヒュウウン！

：マジの戦闘狂だなおい。

幻斗「いいのか、月夜見？」

月夜見「ああ、その内いい遊b：勝負相手になりそうだ」

O h：

幻斗「…………お前、会つてない内にドSになつてないか？」

月夜見「元々そうだぞ？…試してみるか？」ニヤリ  
マジか。

幻斗「遠慮しておく」

そして夜は更けた。

# 湯呑マツスルアタツク

s i d e 三雲幻斗

朱美が俺の部下になつたことを祝つた宴会の次の日。  
ヒュン！

幻斗「お？」パシツ

里内で散歩してると矢が飛んできたので手で掴み止める。  
矢には手紙が巻いてあつた。

幻斗「誰が飛ばしてきたんだ……ルーミアか」

ルーミア「♪♪♪」ブンブン

少し離れた所（500メートル程）からルーミアが手を振つているのが見える。  
さて、手紙を読むか。

幻斗「どれどれ……」

『お客さんが6人もいるよ。全員女で、朱美と幻斗が会つたことあるつて。 ルーミア  
より』

…口頭で説明できたよな？

幻斗「もしかして神子達か……？」

アイツらと別れて数か月経つたが……確かに時期的に考えてちょうどいいな。

幻斗「行つてみるか」

スタスタ

ー自宅ー

ガチャツ

幻斗「ただい……ん？」

中には確かに神子達がいた。 いたんだが……

月夜見「……」じつ

神子「……」じつ

バチバチ

月夜見と神子がお互い見つめあい、 気のせいかバチバチとした音が聞こえる。

月夜見「……幻斗は」

神子「……幻斗さんは」

2人『渡さない！』

バチバチッ！

幻斗「…………は？」 ポカーン

何言つてんだコイツら？

幻斗「朱美、説明頼む」

朱美「あ、はい」

一数分後――

朱美の話によると、どうやら2人は『どっちが幻斗ともつと仲がいいか』で争つてる

そうだ。…うん、ワケ分からん。どう見ても月夜見の勝ちだと思うぞ？

神子「くらえ！湯呑マッスルアタック！」スツ

ポイツ！

神子はそう言つて持つている湯呑にエネルギーを纏つて月夜見に向かつて投げつけた。

月夜見「むつ・・・フンツ！」バツ

ガキイ！

ソレに対して月夜見が拳を振るつて湯呑を割つた。

…つて

幻斗「何やつてんだお前らア！」ドツ

…ゴンツ！

2人『ごツ？』

2人に思いつきり拳骨をしてやつた。

――――――

――――――

――――

――

2人『スマセンでした…』

俺の前に2人を正座させ、今説教を終えた所だ。

：時間？2時間ぐらいだぞ。（長え…）

幻斗「まつたく、初対面でケンカするヤツがいるかよ…神子」

神子「…？」

幻斗「俺と月夜見は5万年もの友情が続いてるんだ。だが、だからと言つてお前と仲がよくないと言つたら違うからな？」

神子「…はい」

幻斗「それと月夜見、お前はケンカをすぐに買うな」

『私は幻斗さんの初めてを貰つたんですよ？』なんて言つた神子も大概だが。：初めてとは、『初めての旅先で会つたニンゲンの友達』らしい。ややこしいなおい！

幻斗「…はあ、説教は終わりだ。お前らは仲良くしろ」  
スタスタ

俺はその場を去り、屠自古と布都に話しかける。

幻斗「お前ら、大変だな」

2人『はい……』ずーん

：どうやら似たようなことが前にあつたようだ。

# 神靈廟

s i d e 三雲幻斗

：さてと。

幻斗「神子」

神子「？」

幻斗「お前らは…何処に住むつもりなんだ？」

6人『…………あ』

：考えてなかつたようだな。

幻斗「安心しろ、里で家を建てれば問題ない」

神子（ほつ…）

幻斗「んじや付いてこい、場所を決めるぞ」

神子「あ、はい」

スタスタ

—————

| | | |

建てる場所は里の中央付近に決まった。

芳香 「寺のような感じにしてほしいのじや！」

幻斗 「いやお前ら仏教徒じやねーだろ!?」

でも道教つてどんな建物で修行するんだ…？

：いやまあ、既に俺の脳内に決まってるんだが。

幻斗 「…和風なものならいいのか？」

神子 「可能ならお願ひします」

そりや可能だ、ウチの住民嘗めんなよ…里全体が和風の建築じやねーか。

幻斗 「なら、俺の中でもう決まつたな」

神子 「…えつ？ああ、前世経由の知識ですか？」

幻斗 「だな。おーいお前ら、設計図描くから手伝ってくれー」

『あいよつ！』ダツ

建築の知識を持つた住民を呼ぶ。

幻斗 「じゃ、描いていくぞ。まず門は…」

カキカキ

ーーーーー

ーーーーー

ーーーーー

カーン、コーン：

建物は建築中であり、器具を打ち込む音が聞こえる。

布都「おお……！」

神子「コレが月の都の建築技術ですか……」

月夜見「花が高いな」ふんすつ

いつの間にか隣にいた月夜見がドヤ顔をする。

幻斗「：ま、後は数日待つだけだな。建物の構造は比較的シンプルだし」

流石に原作知識だけじゃ中身の構造までは思いつかないからな……

幻斗「じや、ココにいてもヒマだし桃タルトでも食べるか」

月夜見「だな」

神子「ですね」

スタスタ

一  
數日後

二

幻斗—おお…

数日 の建設を経て、建物が完成した。

「神子、この建物、名前つてあるんですか？」

玄斗一あるそ?

俺は一息ついて、その名前を書う。

玄斗二神靈廟だトン!

履自古一神靈の靈廟にてか

青姫「いいお名前ですね。」

こうして、神子達は新たに建つた神靈廟に住むことになつた。

その数日後の朝。

：俺は何故か。

月夜見「んふ♪」スヤスヤ

幻斗「」

ギュウウウ…！

目が覚めると寝ている月夜見に思いつきり抱きしめられていた。：昨夜は1人で寝てたんだが？

幻斗「だれかあー、助けてくれえー！」じたばた  
ガチャツ

朱美「どうしました幻斗様…つてええ!?なんで月夜見さんが!？」

部屋に入ってきた朱美も驚いている。：表情からしてグルではないようだ。

幻斗「とりあえず解いてくれないか?」

朱美「あつはい。……あれ?」ググツ

幻斗「どうした?」

朱美「なんか、離れないんですけど…」

幻斗「…はい?」

# 思いついたらすぐ実行

s i d e 三雲幻斗

朱美「なんか、離れないんですけど……」

幻斗「……はい？」

なんでえ？！

朱美「多分、『絶対に離さないぞ♪』って夢で思つてるんじやないですか？」

幻斗「あ、なるほど……とはならんぞ？」

うーん：

幻斗「…………出る方法が思いつかん」

朱美「私もです」

幻斗「起きるまで待つしかないのか……ん？」  
ゆさつ

月夜見「んう……」

：お、目覚めるか？

月夜見「んく……？あ、おはよう幻斗」

幻斗「おはよう。…で、なんだコレ？」

速攻で月夜見に質問をぶつける。

月夜見「コレか？コレは……そうだな、お前に抱き着いて寝たかつたから実行した。  
以上」ギュッ

そう言つて月夜見は俺の胸に顔を埋めた。

：おいおいちよつと待て！？

幻斗「どうやつてその思考に至つたんだ!?」

月夜見「…もう知つてるクセに。お前も満更ではないのだろう？」

：ああ、もちろん気付いてるさ。

幻斗「でもさ、ちゃんと過程を踏んでくれね？」

告白もされてないんだが？

月夜見「…………」（ 。 ハ。）

：なんかめちゃくちゃ驚いてるな。

月夜見「そりいえばしてなかつた!?」どーん

幻斗「おい!？」

忘れてたのか!?過程を忘れるなよ！

朱美（私、この場にいない方が良さそう？…よし、出よう」ガチヤツ

ちよ、朱美!? 空氣読んで出るなよ! ……行っちゃつたな。

月夜見 「な、ならば今言おう…」

こんな状況でするのか。

月夜見は俺から腕を離し、何度も呼吸をするとこちらに向き直る。

月夜見 「幻斗、お前の事が大好きだ。付き合つてくれ」

幻斗 「…………」

⋮はあ。

月夜見 「(…ダメ k 「月夜見」) ……んむつ!?!」

俺は、月夜見を抱きしめてキスしていた。

幻斗 「んつ…」

月夜見 (え、え、幻斗が私をキ、キスして…//) カアア

幻斗 「ふはつ。：月夜見」

月夜見 「い、いきなり何するんだ//」

月夜見の顔はリンゴのように：いやリンゴより赤くなっていた。

幻斗 「よろしくな」

月夜見  
…………！あ、  
あ…………！」

月夜見「はうあ／＼／＼」プシュー  
あ、ダメだこりや。オーバーヒート

あ、ダメだこりや。オーバーヒートしちまつてゐる。

：やりすぎたか？

月夜見 「むぎゅう……！」 ギュツ

幻斗「：フツ」スツ

ナデナデ

月夜見のさらさらとした髪を撫でる。  
今日は祭りになりそうだな。

一一一

一一一

1  
1  
1

11

1

幻斗と月夜見がくつついたことを、ドアの向こう側から朱美が盗み聞きしていた。

ダダダダダーツ！

朱美「すぐ里中に知らせないと！」

その後、瞬く間に幻斗と月夜見が恋愛関係を築いたという事実は広がったという。

# 幻斗、月の都に行く

s i d e 三雲幻斗

『おめでとうござります！幻斗さん、月夜見さん！』

ワアアアア！

幻斗「（。）」

月夜見「（。）」

家を出た瞬間、俺と月夜見に祝福の言葉がぶつけられた。

……おい待て。

幻斗「朱美……お前」

朱美「（♪）」

口笛を吹いてやがる。：はあ。

幻斗「ありがとう、俺達は幸せになる。な、月夜見？」

月夜見「あ、ああ……／＼／＼ カアア

顔が真っ赤だな、うん……俺もか。

その後、1日中どんどん騒ぎだつた。

みんな宴会好きだなあと思った（小並感）

――――――

――――

――――

――――

――

数日後。

1日だけ宴会になると想いきや、何日も連続で宴会になつていた。

：萃夢想か？萃香がいるのか？…気配がないからいな。てかいたら華扇が気付  
いてるハズだしな。

そんなある日。

月夜見「幻斗？」

幻斗「？」

月夜見「月の都に行かないか？」

：ん？

幻斗「どうした、いきなりそんな事言つて」

突拍子もないぞ。

月夜見「私はよく夢幻の里に来るだろう？でもそういう逆はないな……なんて思つたんだ」

幻斗「……確かに」

月夜見「それとな：私達2人で行かないか？所謂新婚旅行つてヤツだ」  
まだ結婚してないけどな。

幻斗「いいなソレ、いつ行く？」

月夜見「…………」

幻斗「……ん？「い……」：い？」

月夜見「い、今から行かないか！？日帰りで！」

幻斗「……W h a t？」

思わず英語で喋つてしまつた。

月夜見「日帰りで月の都に行かないか？……いや、行くぞ。今すぐ準備だ！」スッ  
ガバッ！

月夜見は座つていたソファーから勢いよく立ち会がり、荷物を纏め始めた。  
ドタドタ

服のクローゼットを開けて：おい。

幻斗「日帰りつて言わなかつたのか？」

月夜見「…ハツ!?すまん、つい勢いよく服まで取つてしまつた」  
日帰り……ふむ。別に日帰りじやなくともよくないか?

幻斗「1泊2日ぐらいにしないか?」

月夜見「えつ?」

幻斗「だから、服を選んでくれ」

月夜見「…わ、分かつた」スツ

そして月夜見は服を一着一着見ながら『うーん…』と唸つて悩む。

幻斗「さて、俺も準備するか」

月の都に観光名所：あつたつけな？『穢れ』という概念がなくなつたからもつと楽しい場所になつてる気はする。月夜見曰く色んな娛樂はあるらしいしな。

—数分後—

幻斗「んじや、明日の夜帰つてくるから、留守番を頼む」

朱美「はいっ！楽しんでいつて下さいね♪」

フワツ

そして俺達は空を飛び始めた。

幻斗「…酸素マスクとかいるのか？」

地球と月の間つて真空だが：

月夜見「要らんぞ？あつちにワープゲートを設置してるんだ」  
幻斗「ほーん…」  
なら要らないな。

# 月の都、到着！

s i d e 三雲幻斗

しばらく空を飛んでいると、やがて空間の穴のようなものが視界に入ってきた。  
コオオオオ：

幻斗「アレがワープゲートか？ブラックホールに見えるんだが…」

月夜見「ソレをモチーフにデザインしたからな。入るぞ」

幻斗「おう」

ヒュン

俺達はワープゲートに入る。すると…

パツ

出た先は宇宙：月の地上だった。少し先に見覚えのある門があるので、恐らくあそこ  
が月の都の入り口だろう。

月夜見「一応、迎えは呼んでいる：お前が知っている人だ」

幻斗「俺が？…ああ」

永琳か。と思っていると、その迎えが来た。

「お迎えに参りました…お久しぶりです、幻斗さん」

幻斗「おお、久しぶりだな永琳…大きくなつたな」

前（5万年前）会つた時は少女だつたが、今は東方原作のような外見だ。

永琳「5万年も経ちましたからね。幻斗さんは変わつてないようですが？」

幻斗「不老だからな…」

外見は変わらないと言つても、髪は生え変わつたりするから髪型は多少変わつてゐる

が。

月夜見「…2人とも。話の続きは後にして、都に入ろうじやないか」

2人『ですね』

1月の都一

門をくぐり、俺達は月の都に入つた。

「月夜見様！」

「交際おめでとうございます！」

月夜見通行人に祝福される。

「お久しぶりです三雲様！交際おめでとうございます！」

おつ、5万年前に会つた人もいるな。…そういうえば。

幻斗「なあ永琳、月の都の平均年齢つてどれぐらいなんだ？」

永琳「10万年程ですかね？ちなみに平均寿命は25万年です」  
なつが。：あれ？

幻斗「でも人口はどうなつてるんだ？そんなに増えてなさそうだが」  
永琳「地球人と比べて発展がゆつくりなので、人口の増加もゆつくりなのです。現在  
の人口は5億人程ですね」

5億人：月の大きさから考えると結構多いな。

（月の面積は地球の7%ぐらい）

ザツ

永琳「着きました」

幻斗「おお……」

久々に見たな。

幻斗「月夜見の職場……」

月夜見「月の都役所と言え。私だけの職場じやないぞ」

幻斗「でもなんでココに？」

月夜見「ちよつと、荷物をな：ココは私の職場と同時に自宅だからな」  
確かにそうだつたな。

スタスタ

建物の中は前と比べてだいぶ変わっていた。

…まあ、そりやそうか。

ピツ、ウイイイン…

しばらく歩き、奥の部屋に辿り着くと月夜見はカードキーを挿し、ドアを開ける。中には…家具などが置いてあつた。

月夜見「ココが、私の家だ。快適そうだろう?」

幻斗「そうだな。至つて普通の快適な家つて感じだ」

月夜見「一旦ココに荷物を置いて、行き先を決めるぞ」

幻斗「おう」

# 観光

s i d e 三雲幻斗

俺達が最初に向かつたのは、科学館だつた。

途中で永琳とは別れた。

## 『月の都科学館』

中では近未来的な物から俺じや理解できないような代物まであつた。

幻斗「…何だコレ？」

月夜見「ソレは『超分解扇子』の試作品だ。仰げば空中の汚れを分解する」

幻斗「ほーん…」

つまりコイツが後に豊姫のあの扇子に進化するのか……ん!?

「ゆつくりして いってね！」

顔だけの饅頭のような生物が展示されていた……こ、コイツは…！

幻斗「『ゆつくり』じゃねーか！」

なんでコイツも!?

月夜見「なんだ、知つて いるのか? ソイツは数十年前に生み出すことに成功した生物

でな、ペツトとして人気なんだ」

幻斗「へ、へえ」

ゆつくりをペツトにかあ…まあ可愛いけども…

―――

―――

―――

――

次に行つたのは…海水浴場。

『静かの海海水浴場』

：完つ全に原作崩壊してやがる。俺のせいだけども。

月夜見「今はちょうど夏だからな、ココはかなり賑わつてるんだ」

幻斗「…おい待て」

月夜見「？」

ココ、月だよな？

幻斗「月に四季の概念とかあるのか？」

月夜見「それっぽいものはあるぞ？周期的に気温が高くなつたり低くなつたりするん

だ。今、結構暑いだろう?」

幻斗「…だな。でも30度ぐらいまでは行つてなさそうだ」

月夜見「その通りだな…そうだ、私達も海で泳ぐか？私の水着姿、見たくてしようがないだろう？」

幻斗「むつ」

そりや魅力的な提案だな・・

「すばらしい考え方だ…不採用」どーん

月夜見 「ゑ？ なんで？」

「他にも回りたい所があるからな。それに…」

俺は一息おいた。

幻斗「お前の水着姿は、他人に見られたくないからな」

月夜見「……そ、そうだな//」力アア

ん、ちょっと顔が赤くなつたな。デレだか。

(元々デレツデレだぞ)

1

1  
1

1  
1  
1

—————

最後に言つたのは…山だつた。

### 『月帝山』

どうやら地球のような大自然が恋しくなつて作られた人工的な山らしい。

幻斗「おお…コレが人口物かよ…」

月夜見「ゆつくり登ろうじやないか」

スタスタ：

—3分後—

「グ  
オ  
オ  
！」

幻斗「熊もいるのか」

月夜見「他に猪とか鹿もいるぞ。地球から連れてきたんだ」

幻斗「立派な外来種じやねーか」

月夜見「…月に外来種もクソもないだろう?」

幻斗「足し蟹」

—32. 8778分後（は!?) —

しばらく歩いて、やがて山頂にたどり着いた。

幻斗「おお……！」

俺は見える景色に見とれていた。月の都が一望できた。  
月夜見「幻斗、写真を取らないか？」

幻斗「賛成だ」

スツ

カメラをセットして……と。

幻斗「5、4、3、2……んむつ!?」

月夜見「んつ」チユツ

写真が撮られるタイミングで月夜見がキスしてきた。

パシヤツ

月夜見「どれどれ……ふふつ、いい撮れ具合だ」ニコツ

幻斗「……ま、いいか」

そして俺達は満足しながら帰ったとさ。

# 月でもラーメンは美味しい

s i d e 三雲幻斗

『濃厚とんこつ 月蘭』

幻斗「ココは?」

月夜見「私の行きつけのラーメン屋だ。夕食はココでしよう  
ガラガラ

「お、月夜見様と三雲様！らっしゃい！」

月夜見「いつものを頼む。幻斗もソレでいいか?」

幻斗「いつものつて?」

月夜見「コイツだ」スッ

『豚骨ラーメン（エクストラチャーシュー、半熟卵、もやし付き）』

なんかトッピングまで書かれてるな。

幻斗「俺もソレで」

「うっす！とんこつ二人前！」

—5. 24分後—

「まいど！」

コトン

幻斗「おお…！」

凄え美味そうだな。

ラーメン屋は夢幻の里にもあるが、コレはコレで…何というか、映えるな。  
2人『いただきます』

ズズツ

コ、コレは…！

ドドドドドドド

幻斗「うんまあああああいッ！」 どーん

(ジョジョの億泰か！)

クツソ美味ええ！

月夜見「…うむ、美味しい」

幻斗「ズズズズズツ…」

コレが月の都の技術か…！

(半分正解)

幻斗「チャーシューも！半熟卵も！麺も！全部ツ！美味しいッ！」

もはやキャラ崩壊のような言動をする俺。

月夜見（流石にキャラがブレてないか…?）ズズツ

――――――

――――

――――

――――

――

幻斗「ふい、美味かつた」

月夜見「機会があればまた行くか?」

幻斗「おうよ!」

スタスタ

♪MULAストーリー　　宇宙～月へ行こう

辺りはすっかり暗くなり、静かになつていた。コレが月の夜か…

しかし建物からは光が出ており、ソレがまた幻想的な風景を作り出していた。

月夜見「どうだ?月の都の夜景は」

幻斗「何というか…懷かしいな。前世で夜の大都市を歩いてるたような感覚だ」

月夜見「そうか「ただ…」…?」

幻斗「空気は澄んでるし、星空は綺麗で…ファンタジーの世界にいるみたいだ」

月夜見「…ファンタジー、か。前世のお前にとつてはそうだろうな」「だろうな。」

月夜見「だが…」

今のお前にとつてはコレが紛れもない現実であり、真実である。そうだろう？」

幻斗「…………！ そう、だな」  
いい事言うじやねえか。

月夜見「さあ、帰ろうか」

幻斗「ああ」

|

|

|

| | | |

月夜見「♪♪♪♪」ギュツ

幻斗「…………」ナデナデ

月夜見は俺の膝に頭を置いて、俺はそんな月夜見の頭を撫でている。  
この穏やかな雰囲気は……正直かなり好きだ。

幻斗「……つと、そろそろ寝る時間だぞ」

月夜見「む、もうそんな時間か。なら…」ずい  
ぐいーつ

月夜見は顔を上げ、腕を伸ばす。

月夜見「シャワーを浴びてくる。覗きたいなら好きにしていいぞ」

幻斗「ゑ」

：しつとんでもない事言うなよ、やるかもしないだろ。

# ぢごくの女神さん

s i d e 三雲幻斗

次の日。

幻斗「んう…ん?」

月夜見「んくく♪」

ギュウウウ：

月夜見が幸せそうな顔で俺を抱きしめていた。もちろん寝ている。

幻斗「…抜け出せねえ」

しばらく待つか…

130 minutes later -

月夜見「むう…おはよう幻斗。んつ」スツ

チユツ

幻斗「おはよう。そろそろ離してくれないか?」

月夜見「やだ!」ギュツ

…はあ。

幻斗「甘えん坊だな」ナデナデ

月夜見「むふう…」

――――――

――――

――――

――――

――

支度を済ませた後、俺達は家を出た。

幻斗「今日は何処に行くんだ？」

月夜見「特に決めてないな。どうしようか…そうだ！」

幻斗「？」

月夜見「私の仕事場に行こう！」

：は？

幻斗「は？」

思わず心の中で思っていた事が声に出る程、変な回答だった。

月夜見「ちょっと会わせたい人がいるんだ」

幻斗「…？」

会わせたい人？

うーん…サグメか依姫か豊姫か…誰だろうな？

—移動—

という事で、月夜見の自宅がある所兼職場に戻つたが…

「やあやあ、君が三雲幻斗ね？」

幻斗「（。△。）

今、俺の前にいるのは驚きの人物だつた…

ヘカーティア「私はヘカーティア・ラピスラズリ、地獄の女神よん♪」ヘカツ

幻斗「お、おう…よろしく…」

まさか東方最強キヤラがお出ましになるとはな：

月夜見「ヘカーティアは私のビジネスパートナー的存在でな、ちょうどよかつたから会わせておこうと思つたんだ」

：ちなみに、今ヘカーティアが来ているTシャツは『Welcome Hell』ではなく、『M o o n i m o o n i』である。月（m o o n）とむにむにを掛けてると思うが、中々面白いセンスだ。

ヘカーティア「ところで…」

幻斗「？」

ヘカーティア「幻斗って強いのかしらん?」

月夜見「私と同格だな」

ヘカーティア「ふーん……?」じつ

幻斗「ヘカーティアって月夜見と戦った事あるのか?」

ヘカーティア「あるわよん、私がギリ負けたわ…それでは、私と戦わない?」

幻斗「おう、いいぞ」

最強キヤラと戦うつて、ロマンがあるしな。

月夜見「よっ」カチツ

⋮ヒュン!

月夜見が何かのスイッチを押すと、俺達は談話室から戦闘場に転移した。

ヘカーティア「ルールはどうするのん?」

幻斗「『一人』場外になる、降参、気絶で負け判定…でどうだ?」

ヘカーティア「む? 1人の部分を強調したつてことは…」スツ

⋮バツ!

ヘカーティア『私達が3人いるのを知ってるのかしらん? 初対面なのに』

幻斗「⋮俺の能力を使つたんだ、こうやつて」スツ

\*ヘカーティア・ラピスラズリ

パワー：70億×3

能力：3つの体を持つ程度の能力

地獄の女神。頭に惑星を乗せている。

俺の手のひらの上にヘカーテイアの特徴が表示された。  
パワーは某小説より10億低いようだ。

ヘカーテイア異界「なるほどねん…」

ヘカーテイア地球「それじゃあそろそろ」

ヘカーテイア月「戦いを始めましょうかん♪」

幻斗「ああ…！」

# 惑星が降つてくる

s i d e 三雲幻斗

ヘカーティアと戦い始めてから数分が経つ。

ヒュン！

幻斗「ツ…！」サツ

コイツ、いやコイツら…

地球へカ「ほーい！」ポイツ

幻斗「三雲斬り！」ドツ

ズバツ！

頭に乗つてる惑星みたいなヤツのレプリカを召喚して投げつけてくるんだ！何だよ  
このワケ分からん攻撃！？

幻斗「ブルー「どうつ！」…チツ！」サツ

しかも投げて投げて投げまくるから隙がないんだ……え？攻撃がシヨボいつて？そ  
んな事ないぞ…

異界へカ「隙あり！」ポイツ

幻斗「うおつ!?」ドゴツ

…バゴオ!

幻斗「ぐはつ…」

この玉の質量…惑星と同等の質量があるんだ…ソレを時速150キロぐらいで投げてるんだコイツら…

月へカ「あら、数分前の威勢の良さはどこに行つたの?」

幻斗「あんな笑える攻撃でこんな笑えない威力なのはおかしいだろ!ブルーインパクト!」カツ

ギュオオオ!

異界へカ「きやつ!?」ズドツ

よし、やつと1発入つたぜ。

(今まで1発目!?)

…というか、最初から弾幕張れば惑星を投げてくるヒマとかないよな?

幻斗「疑似ガスター・ブラスター」パチン

ギュイイン…!

地球へカ「何、ソレ?」

幻斗「お前らが惑星を投げれなくする代物だ」ビツ

ぐるぐる

俺はプラスターでヘカー・ティア達を囲み…

幻斗「プラスター回転！」パチン

発射した。

ドドドドドドドドツ！

月へカ「ちよつ!?」サツ

異界へカ「わつ!?」サツ

地球へカ「…あべしツ!?」ドゴツ

…お、当たつたな。

幻斗「行けえええ！」

ズドドドツ！

地球へカ「あばばばばばばばツ：」ズドオン

光線に当たつて怯んだ地球へカーティアに集中攻撃をし、倒した。

バタン

←審判

月夜見「地球へカーティア、脱落！」

月へカ「ええ!？」（ 。 ハ。 ）

異界へ力 「貴方も中々の反則技をつかうじやない……」

幻斗 「反則技には反則技だろうが」

2人『ぐぬぬつ……』

月夜見（なんだ、この結構ふざけた戦い……）

異界へ力 「こうなつたら……！」

月へ力 「原寸大」を降らすしかないわねん……！」

今、なんつった？ 原寸大？

幻斗 「…………まさか」

異界へ力 「ココは異空間だし、大丈夫でしょ。召喚！」 カツ

オオオオオオオオオオ……！」

突然辺りが暗くなつた……いや、待て。

幻斗 「うつそだろおい……」（。。兀。）

俺の頭上には……

ゴオオオオ……！」

惑星としては小さめで……攻撃としてはデカすぎるものが落ちてこようとしていた。

幻斗 「…………ん、待てよ？」

原寸大つてだけで、元々コイツらが投げてた惑星は本物レベルの重さだ……なら。

幻斗「こうすりや、いいじやねえか！」スツ  
ギュイイン！

俺は足に靈力と神力を纏い：

幻斗「て や あ！」

惑星を…蹴り飛ばした。

(…はあ????)

2人『ゑ』

ズドオオオオオンッ！

俺が蹴り飛ばした惑星はヘカーテイア2人に見事命中し、2人はそのまま気絶した。  
ソレと共に惑星も消滅した。

月夜見「……」(。 ) ポカーン

結構遠く（かなり遠い）から見える月夜見は口をあんぐりと開けている。

月夜見「（私と戦った時は原寸大なんか持ち出さなかつたんだがな…）勝者、幻斗」

幻斗「うつし！」グツ

# 月から帰還

s i d e 三雲幻斗

月へ力 「まさか蹴り飛ばされるなんて思わなかつたわねん」

幻斗 「まあ、アレができたのは偶々だ」

普通あんな力で蹴つたら碎けるハズだしな。

月へ力 「それもそうねん……あ、そうだ。私に勝つた記念として……」スツ  
ヘカーティアが出したのは……Tシャツだった。

『ご愛読ありがとうございました』

『カーテン』

『3万さい』

：うん、中々面白いセンスしてるな。

月へ力 「どうぞ♪」

幻斗 「おう、普段着があまりないから助かる」スツ

月夜見 「（ 。 ハ 。 ）

：ん？

幻斗「どうした月夜見？」

月夜見「げ、幻斗。お前はソレを受け取るのか…？」

幻斗「おう、書いてある文字も面白いしな」

月夜見「そ、そうか：（幻斗も中々センスがぶつ飛んでるようだな）  
あ、なるほど。月夜見は『面白いTシャツ』を『変なTシャツ』だと思つてゐる側の二  
ンゲンか。神だけど。

幻斗「それじやな、行くぞ月夜見」スタスタ

月夜見「へつ？…あ、待つてー！」タタツ

月へ力「ばいばーい」

—————

—————

—————

—————

—————

幻斗「次はどこに行くんだ？」

月夜見「そうだな…」

…ん、考えてないのか？

月夜見「帰ろう！」どーん

幻斗「ゑ？」

月夜見「へカーティアに会いに行くのを最後にするつもりだつたからな」

幻斗「あ、そうだつたのか。じゃあ帰ろう」

この新婚旅行（ではない）、結構楽しかつたな。

月夜見「：幻斗」

幻斗「？」

月夜見「これからもよろしくな…？」

幻斗「…ああ、よろしく」

こうして俺達の月旅行は幕を閉じた。

।

।

।

।

।

：ガチヤツ

2人『ただいま』

朱美「お帰りなさい、幻斗様、月夜見様！」

リーファ「旅行は楽しめた?」

幻斗「ああ、楽しかったぞ。お土産もある」

月夜見（お土産？ 買つた覚えがないが……まさか）

ボスツ

俺が出したのは、ヘカーティアから貰った面白いTシャツだ。よく見ると俺に合わないサイズのものもあつたからお土産として渡す事にした。

『部屋着』

『無駄な抵抗はやめろ!』

『人の金で焼肉を食べたい』

朱美「……何ですか、このシユールな文字？」

幻斗「月にいるとある女神さんから貰つたTシャツだ。一枚やるよ」

朱美「なるほど……じゃあコレで」

朱美はそう言つて『狸の目の前で狐うどん』という文字と挿絵が書いてあるヤツを取つた。センスあるな。

リーファ「私は……コレですね」スツ

リーファは……『大胸筋矯正サポート』つて胸辺りに書いてあるヤツを取る。……ブラ

じやないヤツで聞いたことがあるな。

月夜見（あれ、2人ともシャツを受け取つたぞ…私の感性がおかしいだけなのか…？）  
※正常です。

その後俺は里のヤツら全員にTシャツを1枚ずつ渡したとさ。

（Tシャツ貰い過ぎイ…）

# 薬を飲んだ姫さん

s i d e 三雲幻斗

アレから300年。

今のは平安時代…そろそろ『かぐや姫』が起きる時期だ。

…俺は何してるかつて？時空の歪みで朱美達の手合わせを観戦してる。

朱美「ハアツ！」ドツ

ドゴオ！

右狼「うわあ！」

左虎「どわあ！」

ドサツ

朱美「よし、私の勝ち！…どうでしたか幻斗様？」

幻斗「…うん、強くなつたな」ポンッ

ナデナデ

俺は朱美の頭を撫てる。彼女の身長は300年前に比べて10センチ程伸びており、リーフアより身長が高くなつた。

幻斗「炎天掌の威力も上がつてたな」

朱美「はい！めちゃくちや練習して瞬発できるように鍛えました！」

スタスタ

月夜見「おーいお前達、飯の時間だぞ！そこの2人の分も作つておいた」  
スーツの上にエプロンを着た月夜見が来た。

幻斗「おおマジか。右狼！左虎！早くこなきや飯が冷めるぞ！」

2人『は、はい！』

――――――――――

――――――――――

――――――――――

――――――――――

――――――――――

次の日。

月夜見「…何、ソレは本当か？…ああ、分かつた」ガチャツ

月夜見が電話越しに何かを言われて驚いている。

幻斗「どうしたんだ？」

月夜見「実は…永琳が作つた不老不死の薬『蓬萊の薬』の試作品を飲んでしまつた人

がいてな』

幻斗「試作品?」

月夜見「ああ、本来ならシミュレーションで成功かを確認するんだがな…」  
⋮ほーん。

幻斗「んで誰なんだ、その薬を飲んだの」

月夜見「蓬萊山輝夜って言う名前のヤツだ。永琳は彼女の従者だな」

幻斗「⋮えつ、永琳つていつの間に仕える先を変えてたんだ?」

月旅行に行つた時は月夜見に仕えてたハズだ。

月夜見「150年程前だな。永琳が『これから医学に専念したいので、楽な職業に就くことはできますか?』って質問してきてな、その時から輝夜に仕えている」  
⋮なるほどな⋮

幻斗「んで? 輝夜は薬を飲んでどうなつたんだ?」

⋮既に知つてるけどな。

月夜見「薬はどうやら成功作だつたようで、彼女は不老不死⋮『蓬萊人』となつた。⋮  
だが幻斗は知つてるだろう? 完全な不老不死は存在しないと」

幻斗「⋮まあな」

その理論を言つたのは俺だしな。懐かしい。

月夜見「だからあの薬の実際の効果は『不老になり、細胞が1つでも残れば元通りに再生できる程の再生力を手に入れる』：というものだ」

幻斗「へえ…」

つまり細胞が全部無くなれば死ぬ、って事か。

…どこかに細胞を培養しとけばチエツクポイント蘇生できるな、強くね？

月夜見「…それで、輝夜に対しては『無断に試作品を使用した』という罪の罰として、一時的な地球への流刑に処された。輝夜はしばらく地球で暮らすことになるだろう…お？」

幻斗「マジか。じゃあ今輝夜はどの辺にいるんだ？」

月夜見「平安京」

幻斗「……What？」

月夜見「平安京だ」

…まさか最初から大人の姿なのか？かぐや姫真っ只中じやねえか。

# レツツゴー平安京

s i d e 三雲幻斗

幻斗「輝夜つて、もしかして大人の外見なのか?」

月夜見「…? そうだが? どうやら山で遭難していた所で竹取の老夫婦に匿われたらしくてな」  
 幻斗「マジか。色々と前提が変わつてくるぞ。妹紅の件もどうにかしなきやいけないしな。

幻斗「すぐに行かなきやな。メンバーはどうする?」

月夜見「そうだな…まず私は目立つから無しだろう?」

スーツじやなきやいいじやねーか:いや無理か。

月夜見「それに人数を増やしても意味はあまりない:だから幻斗と、1人2人の少数で行くべきだな」

幻斗「分かった。じゃあ「私が行きます!」:お?」

ビュンと朱美が駆け込んで来た。どうやら話は聞いていたらしい。

朱美「…ダメですか?」

幻斗「上目遣いなんてしなくてもいいぞ。お前は俺の従者だしな、主人に着いて行くのは当たり前だろ?」ポンポン

朱美「そ…そうでした!」ニコツ  
よし。

幻斗「じゃあもう1人だが、うーん…」  
：そうだ!

1

1  
1

1  
1  
1

1  
1  
1

「それで、我に着いてこいと?」

誘つたのは神靈廟の住人の1人：仙人の宮古芳香だ。

朱美「幻斗様、どうして芳香を?」

幻斗「1人神靈廟の住人を連れて行こうと思ってな、なんとなく芳香に決めた」

芳香「適当じやな…まあいい。我は行くぞ!」

幻斗「さんきゅ。んじや明日には行くから支度しといてくれ」

芳香「了解じや！」

―――

そして次の日、俺たちは里を出発した。

スタスタ

?

朱美「そう言えば幻斗様、平安京つて昔行つた都と比べてどれ程発展してるんですか

芳香「…確かに、それは気になるのう」

幻斗「発展か…そうだな。当時の都のレベルを1としたら、大体3か4だな」

朱美「へえ…因みに夢幻の里や月の都は？」

幻斗「100と200」

朱美「平安京のレベル低つ!?」

まあ、そう言わてもしやあないな。夢幻の里の技術は俺の前世で言う現代並みだし  
…あ、別に高層ビルが建ち並んでるワケじやないぞ？

幻斗「大体900年後から急速に発展するから安心しろ」

芳香「途方も無い時間じやのう…」

そうか？俺はもう5万年生きてるからその辺の感覚が麻痺してるんだよな…

―――

そんなこんなで数日後、俺たちは平安京に着いた。服装は時代にあつたものに変えて  
いる。

朱美 「人が慌ただしいですね？」

幻斗 「輝夜の噂でもちきりのようだな  
さて、輝夜がいる屋敷を探すか…ん？」

「お父様、それは？」

「これが？輝夜姫に献上する予定の、蓬萊の玉の枝だ」

「ふーん…」

…もしかしてこいつら、藤原家？

# もこたん（の家）にinしたお！

s i d e 三雲幻斗

俺たちは親の方をつけることにした。向かった先は：：かーなーり立派なお屋敷だつた。

一般人のふりをしながらその辺を歩いていると：

「ち、ちつくしょーお！」

「早く代金を払って下さーい！」

ダダダダダダ

2人の男が屋敷から飛び出し、走り去った。

朱美「い、今のは：？」

幻斗「片方は輝夜姫に偽物の枝を渡したヤツで、もう片方はそれを作ったヤツだな」

芳香「どうしてそれが分かるのじや？」

幻斗「うーん、勘？」

適当に誤魔化しておく。

芳香「勘か：凄いなお主！」

アホで良かつた。

朱美「それで幻斗様、これから何をするんですか？」

幻斗「そうだな…」

輝夜の屋敷に潜入して接触を図るのもいいかもしないが…よし。

幻斗「さつきの男、娘がいただろ？」

あの子は外見からしてほぼ100%妹紅だ。原作での妹紅は確かに隠し子か何か  
だつたハズだ…でもさつき普通に藤原（多分）と一緒にいたのを考えると、また原作か  
らちよつとズレてるかもな。

朱美「居ましたけど…まさか攫うんですか？」

幻斗「んなワケねーだろ。ちよつと様子見をするだけだ」

芳香「何故じや？ 理由が見当たらんのじやが…」

幻斗「対した理由じやねえよ、んじや行くぞ」クルツ

スタスタ

|||||

1

……つてことで、俺たちは。

幻斗（もこたんの家に i nしてまーーーす！）ばーん  
 ちなみに妹紅だと確定したし、父親が藤原なのも確定した。どうやつて来たかという  
 と…

—回想—

芳香「お、アレは…」

先程の2人の男がそこにいた。

「代金はしかと受け取りました」

「う、うむ…」

どうやら金は支払われたようで、職人の方はその場を去る。しかしもう1人はその場  
 で立ち尽くしている。

「……ぐつ！」ヨロツ

…つと、こりやマズいな！

幻斗「よ…つと」バツ

咄嗟に動き、男を支える。

幻斗「大丈夫ですか？」

「あ、ああ。すまない…ちょっと体が痛くてね…」

先程の『ちくしょー！』と叫んでいた様子と打って変わつて、男はかなり落ち着いた雰囲気を醸し出していた。

幻斗「家まで運びましようか？」

「…それにはありがたい。頼むよ」

男は申し訳なさそうな顔をしながらお礼を言つた。  
そして案内をしてもらい…大きめの屋敷に着いた。

—終了。of 回想—

幻斗（それでこ→こ←にいるワケだ）

妹紅「あ、あの…！」

幻斗「？」

男：改め藤原さんを手当てしていると、妹紅に話しかけられた。

妹紅「お父様を助けて下さり、ありがとうございました！」

：うん、立派な土下座だな。

幻斗「顔を上げてくれ…俺は当然のこととしたまでだ」

藤原「でも君がしたことは素晴らしいよ。何とお礼をしたらいいか…」

幻斗「お礼、ですが…」

：ちょっと頼んでみるか。

幻斗「俺達は旅人でして、しばらくこの都に滞在したいんですが：ちょっとした宿はあつたりしますか？」